新本 江戸繁昌記 一五

本間文庫
文庫 14
D 265

文庫14
D 265

江戸自慢男一疋

序幕　入谷花圃の場
同　返　下舘螢の宴の場
道具替　山谷田圃の場
二幕目　金龍山仲見世の場
道具替　三谷助六住家の場
大詰　山谷寺町の場
道具替　易行院墓所の場

役人

小森美作守。　浅井内匠。　長田助之進。　戸山軍太夫。　男達三谷の助六、二役　寺社同心小川孫一郎。　男達髭の無休、實は深尾十郎左衛門。　男達不動の吉三。　助六の子分鎌髭の又七。　同　腕鐵の喜二郎。　無

休の子分かんから虎兵衛。　同　坊主小助。　不動の子分奴清太。
植木屋佐十。　縁日商人重兵衛。　重兵衛悴園二郎、實ハ浅井の一子園二郎。　耳の垢取神田の長官、實ハ長田の若黨權内。　易行院の方丈寂心。
麓屋の賣子梅吉。
外に　地廻　三人。　夜商人　二人。　馬方　一人。　仲間　四人。
職人　一人。　寺男　一人。　子分　三人。　出商人　一人。
小森の奥方山吹御前。　小森の妾おさえ、實ハ佐十の娘〳〵お六。　奥女中　浮舟。　助六の女房お卷、二役　中老綾瀬。　吉三の女房お七。
女小性駒野　後に麓屋の娘お米　女小性菊野。　植木屋の女房お花。
外に　侍女　六人。　下女　一人。　娘　一人。
助六の悴助七、後に長田助七。　金龍山の小性橘彌。　同　壽彌。　同
兒富貴丸。　同　兒幸丸。　待乳茶屋の女お滿。　同　お若。　同　お梅。
同　お鳥羽。
以上

江戸自慢男一正

序幕
返し

南翠外史

入谷花圃の場
下舘螢の宴の場
三谷田圃の場

本舞臺一面の平舞臺、ずッと上寄に二間常脚の二重、大和葺本椽附。向ふ葭戸、二重へ毛氈を敷き、鉢植物並べあり。是ゞ續て下手へ朝顔の飾り小家栃葺家根、雛段に朝顔の鉢三段に飾りあり。宜き所に竹床几を置き、いつもの所丸太の木戸片開き戸建仁寺垣。此の外に葭簀張の出茶屋、氷水の荷を置き、白玉心太の道具を飾り、都て入谷花園入口の体。出茶屋の床几に地廻りの若い者三人、好みの浴衣にて腰をかけ居る。水賣の亭主心太を突て居る。娘世話形前垂がけにて盆を持ち立かゝり居る。植木屋の若い者、紺半纏三尺帶にて手桶と柄杓を持ち、鉢物へ水をやッて居る。傍に植木屋の下女前垂ゞけにて立かゝり居る。此見え賑やかな合方へ、とばかみの太鼓と鈴を冠せて幕開く。

地廻○「おい、おぢさんあの太鼓ゝ何だね。」　水屋ていしゅ「あれは此先の隠居所でございますが、とほかみが信心で夜明前からどんどこがら〳〵、お蔭で早く目が覺めます。」　地△「太鼓ばかりで澤山だのゝ、」　地×「鈴だけ餘計ゝ騒々しい。」　娘「いえ賑かでよろしうございます。」　亭「賑かと申しますれば此頃の入谷の賑か、錦魚ゝ藤澤の遊行寺へ流しものゝ成りましたから、此夏あたり商賣の處を替ざなるまいと案じて居たのに、佐十さんの朝顔鉢が大當りで、例の通り常見世を張ッて居ますが、日の出前からお前さん方が腰を掛けてお呉なさるので縁喜がついて、親子ともお腹を滿くして居りますのさ。」　地○「おぢさん、豪儀ゝ世辭がいゝな。成らう事なら其の口前を阿魔にも分けて遣りてえやうだ。」　亭「御冗談を仰やります、お前さん方の樣な意氣な人が持なくッて何うしませう。」　と心太に醤油をかける、娘銘々の前に置く。　地△「大分油をかけなさるが、夫でなくとも自惚と瘠氣ゝ人より多い野郎だ。」　地×「いゝ氣になッてたれ散し、手の着られたものぢやアねえよ。」　娘「おや、此の方の頬の上ゝ紅がついて居りますよ。」　地△「成る程紅に違へねえ。此方達ゝ時から出た切雀、苦舌を夢にも見やしねえが。」　地×「汝は大

層もてたと見えて、訝な處を見せつけやアがる。」　地△「ちッと安いが白玉を、」　地×「己達二人に奢んなせえ。」　亭「是ゝ何より宜い御考へで御座ります。水は堀抜砂糖ゝ三盆、何うぞ澤山御上なさりませ。」と白玉を水呑に盛る。此内○は烟草入を腰にさし支度する。　娘「貴下ゝ何に致しませう。」　地○「己アもウ澤山だ。」と立ながら財布を忘れて急ぎ下手へ入る。　地△「到當烟になッて仕まッた……彼奴は近頃めんくがいゝが、小森の邸の仕事ではうんと實入があッさと見える。」　亭「幾干實入が宜ッても、水も飲ますに逃られてゝ、此方の腹ゲ冷ッこい〳〵だ。」　娘「親父さん、今の人が財布をわすれて、」　地×「何だ財布を忘れて行た……女郎の文と書付ばかりざ。」　地△「どれ見せや。夫でもこゝに二朱と三百、湯にでも入ッて朝直しに一杯やッて歸らうか。」　亭「今日は小森の御部屋樣が、此花圃へ朝顔を見にれ出なさるといふ事で、飾付けが出來ました。」　娘「何樣なゝ綺麗で御座りませう。顔んで見せてお貰ひなさいよ。」　△「夫でゝふられた眠氣覺しに、」　×「朝顔でも見て歸らうか。」　△「おい姉や、れ錢はこゝへ置いたよ。」　娘「有難う御座ります。」　是にて△×木戸の内へ入る。此前より植木屋の若い者、下女と

ふざけて居て△の足へ水をかける。　△「えゝ冷てえ何をしやァがる。」　若い者「飛だ粗匆を致しました、眞平御免下さりませ。」　下女「それ御覽、あれ程言ふのに身に染みて掃除をしないものだから。」　若い者「餘計な口だ、其方へ行け。」　と突く。

下女「何が餘計ざ、酷い人だよ。」　と掴み付く。兩人中へ割て入り押靜めて、△「昨夜は廓で助六と髭の無休の喧嘩に出會し、尻尾をまいて逃出したが、」　×「今朝は纍婦と土掘の喧嘩よ飛び込む仲裁人。」　△「止人のあるのが花圃、二人に任して、」　×「呉なせへ。」　と可笑みよて止る。　若「喧嘩もしたくはございません

が、山出の癖に出過ますから。」　女「山出とい誰の事だ、土百姓め肥桶荷ぎめ。」　△「是さもゥ止ねェと云に……今聞たら此方では飾付ぐ出來さといふが、」　×「止に這入た其禮よ、内所で見せて貰はれまいか。」　女「夫は何よりお安い事、私が御案内致しませう。」　若「お先ぐ見えては面倒だから、裏からお歸りなされませ。」　△「夫では裏から、」　×「歸るとしやう。」　下女「かうお出なされませ。」　と、とほかみの鳴物よて下女先に△×上手へ入る。　若い者水戸口を覗いて、　若「まだお先も見えない樣だが、御留寄居役の淺井樣い音に聞えた喧ましや。水屋さんも氣

をつけて粗匆のない樣しなせえよ。」　亭「夫は心得て居りまする。」　娘「御大名の御妾樣い何樣な者だか拜みたいと、夫ゆゑ今朝い一遍も起されずに起ました。」　若「お蝶さんい此夏から滅切女が上ッたから、今よ立派な御大名で抱へたいと言ッて來やう。」　亭「はゝゝゝ其樣な夢でも生涯に一度い見たいと思ひます……お忍びとい云へ十八万石の御部屋樣の御通筋、店を張ても居られますまい。どれ園ッてなど置きませう。」　とお蝶手傳ひて店を片付葭簀を圍ひ下手へ這入。若い者い水を蒔き上手へ這入る。合方にあり、向ふより緑日商人重兵衛、白髮鬘老たるこしらへ、綴斷の繻袢に三尺を締め、半服引草鞋穿よて四手の荷をかつぎ、後より紅繪商人園二郎、着流雪踏穿、やつしよて出で來り、花道よき所にて。　重兵衛「今朝は早く買出をして、日盛までには足腰を伸して午寢をする氣であッたよ、汝のお蔭で寢忘れた。今から行ても荷いあるまい。ちェ忌々しい。」　園二郎「御年寄られた親父樣よ、資本も細い朝貞をお賣せ申して私ぐ怠けて居てい濟ませぬと、思ひましての夜商ひ、始めて廓へ參りましたが、勝手を知らぬ悲しさにい、無休樣に突當ッたとて、坊主とやら小助とやらに繪を破られた其上に、寄て集て撲打擲、

已に命も危い處を、三谷の親分助六樣が喧嘩を買て下されまして、虎の尾を踏み漸々と戻りました昨夜の始末、嘸御腹も立ませうゞ、災難ゆゑと親父樣御免なされて下さりませ。」　重兵衛「世話の燒た孩兒でいある。夫といふのも常日頃親の詞を聽ねえからだ。此方の家へい貴樣を伴れて來られた義理ではねえけれど、去る御人から賴まれて……なに、賴んで資本を借なければ、明日ゝら家業が出來ねえから、夫れで願ッて遣るのだぞ。此のちともに慈悲深い親の言ふ事反くまいぞ。」　園二郎「必ず仰せい背きませぬ。」　と本舞臺へ來り密と內を覗く。此內上手より佐十の女房お花、老たる世話女房にて烟草盆を持て出來り、數寄屋よ置事あッて、お花「花も殘らず咲き揃ひ、葉に置く露に朝日がさすのに、まだ御運びいないと見える。」　重兵衛「へえ內儀さん重兵衛でござります。」　お花「おゝ重兵衛さん、大層今朝い遲かッてはござりませぬか。小鉢ゞ除てありますから、此方へ這入てお持なさい。」　重兵衛「夫は有難うござります。」　とずッと入る。園二郎は後よ隱れる。重兵衛「えゝ內儀さん、親方は御留主でござりますか。」　お花「良人い內に居りますが、何ぞ御用でありまするか。」　重兵衛「えゝ、少し親方に御目に懸ッて願ひたい

事がござります。」　とお花園二郎に目をつけ思入あッて、　お花「唯今是れへ呼びませう。」　と、此中奥よて、　佐十「掃除は殘らず出來上たか、飾棚も宜らうな。ゞれ夫れでは行て見やう。」　お花「おゝ幸ひ良人が參ります。少しかけてお待なさい。」　と是よて佐十老たる扮へ、袴を着けて出來り、床几に腰をかけて、　佐十「重兵衛待て居た。子供い達者で居ますかな。」　重兵衛「へえ僥倖とよい里親がめつかりまして、其方へ預て遣てござりますが、もウ此節でい笑ッたり語ッたり、蟲氣も起らずぴん〳〵して居りますよ。」　お花「男の子供い育が惡く心遣ひなのも故に、手許よ置て育たいと思へゞ愜はぬ娘の不仕ざら、孫とも言はれぬ浮世の義理。」　佐十「また愚痴をこぼすのか、露ッぽいのゞ商賣でも、日の出前から涙の露い心の花が凋れるわい。……夫よつけても重兵衛さんといつも達者で仕合だ。」　お花「思はぬ愚痴で忘れて居ました。重兵衛さんが親方よ願ひたい事があると仰ります。」　佐十「私に賴みと言ひなさるのゞ、まア何樣な事ですな。」　重兵衛「いや資本も細けりゃ身代も細いが常の一本燈心暗い代りよ油も減ゞ灯も消えぬが何より一德、夫れが昨夜はお前さん、鼠を嚙る鼠めゞ暴れて油をひッくり返し、親父を闇にしま

したので、油の無心に參りました。」　佐十「鼠といふ奴は、得て惡戯をしたがるもの、子鼠ゆゑよ穴を開られ、塞いで廻る親の因果、夫でも其方の子鼠は、巣から出ないで孫鼠の、里扶持までも引て來やうが、此方の鼠い何處へ行て、地獄罠にかゝッたやら。」　お花「いたづら者ほど可愛いい何れの親も同じ事。意地の穢な い鼠ゆゑ、鼠取でも食はせぬかと、口へい出さねど心の苦勞。」　佐十「重兵衛さん、親ほど馬鹿はございませぬなア。」　と是にて園二郎術なきこなしにて、前へ出て兩手を突き、　園二「若氣の至りと言ひながら、色に迷ふて前後の考へもなく、れ六さんを疵物にした其上に、子まで設けて御苦勞うけ、家出をれさせ申しましたも皆私しが身の誤り、御詫のしやうもございませぬ。」　重兵「胤をれろした悴なら、撲のめしても御詫をしまそが、義理ある中の園二郎、手出しもならぬ此爺が胸い湯玉が湧覆り、燃るやうでございまする。」　と態と口惜がる。佐十い氣の毒といふ思入あッて、　佐十「園さんばかりが惡いのでもなし、れ六の心がろくでないから。世間よ例のないでいなし、出來た事を今となり、口惜がッても及ばぬ事だ。……さて重兵衛さん用といふのは、」　重兵「外の事でもございませぬが、昨夜

此奴が吉原で髭親分と紛紜が出來、商賣物を毀されました。」　園二「面向ならぬ此方様へ願ふい餘り厚顏しいと、嘸御立腹もございませうが、親父も思案の付ぬ金、面を被ッて御願ひに、」　重兵「親子揃ッて」　園「上りました。」　佐十「夫い定めて困んなさらう、澤山の事でないならば、お花御用立て上げるがいゝ。」　重兵「毎度御無理を願ひますのに、」　園二「夫れは難有うございます。」　お花「夫んなら此方へお出なさりませ。」　佐十「園さんにい用もあるから、暫らく奥で待て下ださい。」　重兵「夫れでは親方、」　園二「内儀さん。」　お花「さア私も一所に行ませう。」　と前の鳴物よて、お花先よ重兵衛園二郎上手へはいる。佐十は腕組をして、　佐十「日頃御贔負にして下さる長田様の御詞といひ、今重兵衛が話しといひ、若や淺井内匠様の隱兒とやらい園二郎……夫が定なら聞糺して、殊に寄ッたら」と奥へ思入あッて氣を替へ、　佐十「夫よつけても人の子い、金銀珠玉に勝ッたる寶といふが、碌でなしを子に持つ親にい石瓦、夫れい棄れば清くも成らうが、切ても切れぬ血筋の緣。何うした因果か娘のおろく、觀音様の水茶屋で、暖簾に染た反古文のかしくが綽名の通り者、色といふのい園二郎許りでないのい知れた事、何處に何うし

た綾があるやら、産をしてから二十一日、枕直しをしたばかりで居なく成たもはや三月、血も治まらぬ身體ゆゑ、何うして居るかと案じて居たに、聞けば屋敷の御妾に上ッて居るといふ噂。若し今日見える小森家の御部屋が娘のおろくなら、折を計ッて園二郎に意見をさせやう此方の魂膽、あゝ子ゝ三界の首枷だなァ。」と合方きッぱりとなり、向ふより小森の留守居淺井内匠、四十格好の家老、繼上下大小にて、後より用人戸山軍太夫、同く繼上下大小にて、仲間二人附添ひ出來り、花道よき處よて、　淺井「植木屋佐十ゝ彼れなる家でござるゝ。」　軍太「いかよも彼れこそ花間……それ家來共、」　仲間「はッ」　仲間「はッ」と本舞臺へ來り、仲間「賴母う〳〵。」佐十「はッ」　と佐十木戸の處へ來て手を突く。　仲間「淺井内匠樣戸山軍太夫樣の御越だぞ。」　佐十「先刻より御待受申し居まするでござりまする。」　と是よて仲間花道へ歸り首を下る。兩人目禮して本舞臺よ來たり床几に住ふ。　軍太「こりや佐十、昨日ゝいかい大儀であッた。是ゞ即ち淺井内匠殿ぢや、能く御禮と申し上げえ。」　佐十「はッ」　と平伏してぢッと顏を見、園二郎と能く肖て居るといふおも入。　内匠「御忍びの御遊覽なれば、取構を致すなと申し付け置たるよ、掃除萬端

行屆き神妙よ存ずるぞ。」　佐十「はッ、恐れ入たる其御詞、佐十身に取り面目よ存じまする。」　軍太「豫て申し含め置しゞ、世間を憚る御物詣、其の休息の事なれば、主人を始め家内一同御目通りゝ相叶ぬぞ。」　佐十「委細承知仕つッてござりまする。」と思入あッて上方へはいる。　軍太「家來共表にて暫らく休息致して居れ。」　仲間「はッ」　と下手へはいる。跡兩人四邊こなしあッて、……去て彼の一義の御工風は、何と爲さる御所存なるか。」　軍太「最早誰も居りませぬ。」　内匠「彼の一義とは何でござる。」　軍太「いやさ御部屋を懷妊なりといふとも、十月ゝ腹よある嬰兒、ぎやッと生れた若君が誕生前でゝ何やら異なもの。」　内匠「其義ならば御配慮御無用、多く違ふて七ケ月八月兒ゝ間々ある慣ひ、愈よ御懷妊と沙汰ある時ゝ、拙者が宅へ御預り申し上げ、七月兒と披露して御誕生まで秘め置けば、智惠づき遲き悴の小兒、四月の相違を眩さん事何の思案に及び申さう。」　軍太「然れども嬰兒を一度も御目よ懸ぬ事ゝなるまい。」　内匠「夫ぞ何れの嬰兒なりとも、借て當座を眩める所存。」　軍太「流石ゝ〳〵内匠殿、こりや適れな御思案ぢやわい。」　と是にて以前の重兵衛朝顏の荷をかついでつか〳〵と出來り、　重兵衛「淺井樣。」　内匠「これ。」

と押へて四方よ心を配るこなし。　内匠「園二郎は約束通り此家の内へ參ッて居るか。」　重兵衛「御氣遣なされまするな、髭親分と仕組ぶ事もしッくり嵌ッて上々吉。」　内匠「能く致した、褒美を取らさう。」　と内匠懷中より金を出し、紙よ包んで重兵衛に遣る。重兵衛包みを撿めて、　重兵衛「これは小粒で十五両。」　内匠「當座の禮ぢや……早く參れ。」　重兵衛「有難うございます。」　と荷を擔で重兵衛向ふへ這入る。

内匠「最早御入に間もあるまい。」　軍太「是にて御出迎ひ仕つらん。」　と出の唄よなり、小森の愛妾おたえの方、御守殿好の着つけ。續て奥女中浮舟、同じく御殿風。後より敵役の侍女四人、熟れも青傘にて向ふより出來り、よろしく花道へ並ぶ。

たえ「里いあれて人いふりよし宿なれや、庭もまがきも秋の野良、何處を見ても女郎花桔梗野菊の中垣を、力よ覗く朝顔の花の宿なる里の家々。」　浮舟「お庭の花とい事異り、花いろ〳〵の此景色。今日の御伴で此頃の暑氣も忘れて此の眺め。」

侍㊀「私どもい花よりも觀音樣で豆を喰ふ鳩を追ふのが面白さよ、」　侍㊁「御下向遊ばすのも知らずに、夢中で追ふて居りましたら、」　侍㊂「御幣の乘た御神馬がうッかりして居る鼻先で、」　侍㊃「尻尾を急に掉ましたので、吃驚致して氣が着ました。」

たえ「露の干ぬ間よ花圃へ、」　浮舟「先づ御越し」　侍女四人「遊ばしませう。」　と歌にて本舞臺へ來る。内匠軍太夫出迎ひて、　内匠「御部屋樣にはお早い御下向。御席の設けもさせましたれば、」　軍太「彼れにて暫時御休息。」　たえ「淺井樣にも戸山樣よも御心づかひの休息所、有難うございまする。」　浮舟「先づお掛け遊されませ。」

たえ「左樣なれば御免なされて下さりませ。」　とおさえ數寄屋に腰を掛る。皆々よろしく住居、　たえ「今歳い時候の早い故か、菖蒲の花の池水に姿を映す其中に、可愛らしい此朝顔、」　内匠「世にも稀なる變り咲。また大輪の朝顔を丹誠致せし當家の主人、今日の御覽で面目を起しました。」　たえ「見る目も覺める花の色、成らむ君の御覽に供へ、御病氣の御慰みに差上げたうございます。」

内匠「恐れ入たる御心入、夫ばかりでも驚の事御本快遊ばしませう。……のゥ浮舟どの。」　浮舟「淺井樣の仰せの通り、御辛苦の誠を佛の御納受あッて、朝に開く朝顔の」　軍太「露のしたゝる御全癒い瞬くうちでございませう。……侍女衆い退屈ならん。奥にも夥多の花あれば、孰れも御免を被ッて、暫く休息なさるが宜からう。」

侍㊀「左樣なれば私し共い、」　侍㊁「御免を被り奥庭を」　侍㊂「見物致して參りませ

うわいなア。」　と嬉しいといふ仕打にて三人數寄屋の後へ入る。　浮舟「若い女中といふ者ゝ、苦勞ゲないか浮々と元氣なものでござんすわいなア。……何ゝとも　あれ御部屋樣、先程よりの御徒歩にて嘸御喝でござんせう。軍太夫樣御茶一つ。」

内匠「成程家人を遠けたれば、れ茶の用意を失念致した。軍太夫殿御苦勞ながら、」

軍太「然らば拙者が御坊主を勤めますでござりませう。」　と合方にて軍太夫奥へ入る。内匠あたりへ思入あッて、　内匠「幸ひあたりよ誰も居らず、浮舟どのへ折入て御頼み申す義がござる。」　浮舟「何私しへお頼みとは。」　と誂への合方になり、内匠思入あッて、　内匠「浮舟殿は先代より御奥勤をなされし故、能く御存の事ながら、大内記樣ゝ御連枝多く、御代は榮えに榮えしゝど、忠繼樣は御早世、忠武樣も御世子なく、我ゲ君樣は忠繼樣の御長男ゆゑ、御養子の御披露あッて御相續。然るにまたもや奥樣には、只御一人の御子樣在さず。斯てゝ御家の浮沈にも拘ゝる事にならんも知れずと、晝夜心を碎く拙者、人の嘲り世の譏も顧ずして、御部屋樣を推擧なせしゝ、何卒して御家の御血統絶さぬ苦忠。夫を御存あらざるか、中老綾瀬を始めとして、御師範役たる長田等が、法界悋氣よ奥方の嫉妬を助けて、

此節では御中らひも薄きとやら、御頼み申もは茲の事、御家の御爲を思召し、萬事よしなに浮舟どの、御執爲を願はしうござる。」　たえ「賤しく育し妾なれど、君を大切御家を大事と思ふ誠は、奥樣にも劣らぬ積りでござんすが、其心底を御存じないのか、上邊ばかりゝ御寵愛人よ優れて深けれど、御情とてゝ織女のぬる夜の數も稀々よ、中を隔る天の川、水增す雨に片敷の袂を搾らぬ夜とてゝなし、」

内匠「閨の扃に鵲の橋を渡して御世繼の御産あるやう浮舟どの、」　たえ「偏へにれ頼み」

内匠「申しまする。」　浮舟「始めて御上遊してより、御附よなりし此の浮舟、此程からして侍女衆が口惜ゲッての噂話し、毎夜の御入も御酒宴ばかり、御退の時ゝ奥樣から御人が見ゐて、別殿へ御歸り遊す君の御心、合點往ずと思ひましたが、扨ゝ爾した事でおッたか。其義ならバ御部屋樣、必ず御案じ遊ばしまするな。此浮舟が身に代へても屹度御入のありますやう、」　たえ「計らふて下さんすか。」

内匠「夫は千萬忝けない。」　浮舟「何の御禮に及びませう。是といふのも御家の爲め、忠義は此でござりまする。」　と内匠れたえと面を見合して、甘く行たといふ思入あッて氣を替へ、　内匠「戸山ゝ何を致して居るか、御茶もお上申さぬとは、」　と

合方よなり、上手より園二郎袴羽織にて薄茶を持ち出來り、服帛のまゝおたえの前に置き、一禮してぢッと思入れ上手へ控へる。　内匠思入あッて、　内匠「御部屋様にい路次の御勞れ、御休息を遊ばす間、浮舟殿も園内の花を御覽なされぬか。」

浮舟「有難うはござりますが、御附の女中も居りませぬ。」　たえ「其御遠慮よは及びませぬ。此屋の者も居ります故、私しには御搆ひなされず。」　浮舟「夫れでい御免遊しませ。」　と唄になり、少し怪いといふ思入あッて、内匠と共に奥へ入る。後合方にてあさりを看廻し、園二郎そッとおたえの傍へ行く、其の手を取ッて、

たえ「園さん、能く此處に居て下さんした。」　園二「闘の高い此方の家、今日は免れぬ用があッて、面を被ッて來たところ、只今一人の御侍が御茶の通ひを勤めよと御指揮ゆゑ、怖々ながら漸う此處へ出たわいの。而て彼の三坊は久しう顔を見ませぬが、蟲でも起りいしませぬか。」　たえ「淺井様の御世話よて、乳母にも乳ゞ澤山あり、蟲氣も起らず此節でい綺麗に肥ッて愛らしいと、聞くばりにて奥勤めい顔見る事さへ叶ひませぬ。……夫よつけても園さんへ、お前ふ安心させる事ゞ」とあたりへ思入あッて、　たえ「ござんすぞえ。」　園二「私に安心させる事とい何う

した事だ。」　たえ「別の事でもござんせぬゞ、お前の親御が知れたわいな。」　園二「常々尋ぬる誠の親ゞ、」　たえ「あい、知れたといふのも外でいない、奥にござる淺井様が宿直の折に妾へ話し。私にも一人の悴ゞあれど、今では音信不通の者。仔細あッて幼少より母なる者に預遣り、出入の魚屋重兵衛と申すものよ遣せしが、今は立派な男になり、紅繪を賣て居るとの事と、問はず語りを聞たので、夫でい若しや斯々と、お前の事を話したら、内匠様は喜んで、爾うとは疾より知たゆゑ、子供の養育其方の推擧、是れで萬事を察して呉れと、言はれた時の妾の嬉しさ。園さんお前も落着たらうね。」　と、園二郎い悒りして、

園二「夫では淺井内匠様ゞ誠の親であッたるか。」　たえ「何だねえ靜よおしよ。」　と誂へ替た合方に成り、　たえ「夫ればかりぢやァない斯いふ譯さ、能く落着て聞てお呉よ。……妾も山の二十軒で、〳〵お六と異名まで取た暖簾の莫連者、多くの人は迷はしたが、お前の世話で一枚繪賣て貰ッた親切から、野暮に復ッてお前に惚れ、堅いと噂のお前はんに、色の迷ひを敎へたが因果の胤を身に孕し、ぱッと世間へ浮名ゞ立ッて、稼業も閑になッたから、家へ歸ッて身二つよ成りいなッたが親達が、去ッ切

なしの愚痴泣言、夫れを聞くのが嫌で堪らず、家を飛出し堤下の髭親分の所へ隠れて、御殿摸様の大振袖、やの字の帶の究屈な思ひで、花見に行たのが小森の御前の御目ゑ留り、淺井内匠の娘分御部屋様とか御妾とか、榮華自在の身になッたも、皆なお前と彼の子の爲め、死病に極ッた疳性の殿ゞ往生してしまへバ、後の世子ハ彼の三吉、妾ハ御腹、お前はんハ御近習頭で暮せる身分、何と實ゞあるだらうね。」　園二「身貧に暮せど園二郎、不義非道に從ハうや。……これおろく、お前はなァ〳〵、親御二人はお前の身を苦勞になされて、夫ハ〳〵先刻も私へ云みじみと涙ながらの御物語。お前が今の身ゑなッて、此五十日は毎朝々々私を呼で奥山の茶屋で逢引するのさへ意見しやうと思ッて居るのゑ、まア大それた其巧み、惡事の後ゞいつまでも榮えるものと思ふて居るか。善惡ともに意地堅い心を善に飜へし、今から妾の龜鑑ぞと言ハれるやうにこれおろく、何うぞ聞分て謹んで呉れ。　と園二郎思入にていふ。おろく空嘯いて、　たえ「今の若さに爺い染た愚痴を言ふと女が嫌ふよ。……お前の親ハ淺井様、其の巧みに從ハねバ、お前ハ不孝ゑ成りませう。夫ともお前が何處までも仁義立をするなら……うム妾を殺して訴

人をおし。」　園二「さァ夫ハ、」　たえ「男らしくさッぱりと妾をこゝで殺してお呉。」と身體をすり着る。園二郎當惑のこなし。　爰へ奥より、　佐十「園二郎に成り替り、己ゞ命を取て遣らう。」と以前の佐十續てお花上手より出來る。おたえ之を見て惚りして、　たえ「お前ハ親父さん。」と逃やうとするを、佐十引据てきッと成り、佐十「やい娘、正直正路な此親の子と言れるのが不足なのか。生心つく時分ゝら男出入で散々腹、親ゑ泣をかけた揚句、家出をしたは宜けれども、何だ今聞て居れバ、」　お花「御大名の御妾と夢にも見られぬ出世をして、髪の飾や身の廻り、途中三途で出逢ては、親にも何處の奥方か分らぬ程の身に成ッた果報を讐の惡巧、」　佐十「言ハうやうなき人畜生、何うでも心を飜へさぬなら、小森様の御邸へ罷り出て、斯々と一伍一什を物語、お暇を願ッて伴戻らうか。」　たえ「さア夫れハ、」　お花「但しハ心を入替て、其惡心を思ひ切り、御家の御爲を專一に勤める氣にはなられぬか。」　たえ「さア夫れは、」　園二「何うぞ心を取直し、御兩親のお心を安めてたも。これおろく、これぢや〳〵。」　と手を合て拜む。是にておたえ思入あッて、　たえ「あゝ惡い事ハ出來ないもの、誰知るまいと思ひの外、惡事千里の譬に漏れず、と

や父さんや母さんにも知れたい是れぞ觀音様が止とのれ告でございませう。今日といふ今日弗りと心を入替ましたら、もし父さん母さん、園さんも此事は人に話して下さんをな。」と空涙を覆して言ふ。　佐十「誠其方が其氣なら、何しよ人に言ふものぞ。」　お花「隨分身體を大事よして、御奉公をしたがよい。」　たえ「夫れでい御心釋ましたか、御嬉しうございまする。」　佐十「其方ゞ嬉しく思ふより、親の心いまた一倍、」　お花「胸の塞ゞ下りましたゐいのゥ。」　佐十「夫んなられろく……いや御部屋様、」　お花「ゆるりと休息なさりませ。」　と兩人やッとしたる思入よて上手へ入る。たえ丁寧よ會釋して面を上げ、ぺろりと舌を出し、氣を替へて立上る。是よて奥より内匠先に浮舟、軍太夫、侍女四人出來り、　内匠「餘ほど時刻も經ちましたれば、」　浮舟「君よも定めて御待かね。」　軍太「いざ御歸館」　侍四人あらせられませう。」　たえ「思いず保養致しました……これ若い者、」　園二「はッ」たえ「今申し付けた朝顔後程まで御邸へ。」　と思入よて言ふ、園二郎合點の往ぬといふ仕打。　たえ「それ委細の事い此繪圖面、花を揃へて……な。」　と文を投る。園二郎拾ひ上て思入あり。　園二「はッ、委細承知仕つりました。」　内匠「然らば御

立ち。」　浮舟「お伴の方々。」　とれたえ下手へ行く。園二郎氣よ懸る体にて、つかゝと前へ出て、　園二「諄いやうだゞ彼の事い、」　内匠「御部屋よ向ッて、」　と刀にて押へる。木の頭。　内匠「無禮者め。」　ときッと言ふ。皆々引張宜しく、早き合方にてひやうし、幕。としらべよて繋ぎ、直よ引返す。

本舞臺上寄に三間の高二重、本庇折廻し本椽附。向ふ上手床の間好みの掛物を掛け、花生に花菖蒲を活け、續いて袋戸棚、此下違棚。下手銀襖、出入り上の方後へ下て一間附屋臺。下の方本屋根高欄附、渡殿。此後奥庭の遠見。渡殿の下泉水の縁を置、中水を畫きし布張、岸に花菖蒲あり。二重三方へ紫縁を取し伊豫簾をおろし、都て小森家下屋敷の体。爰よ侍女三人。お百、お千、お万、いづれも侍女形、螢籠を持ち椽側に住居、この見ゑ琴唄にて幕開く。　と合方にて、

お百「何と皆さん、御上邸と違ひまして此金杉の御下屋敷い、御殿も狹し御長屋や長局がござんせぬ故、晝い御庭の花を摘み、豆や茄子をちぎりますので、氣も晴晴と致しまそるが、日ゞ暮ると寂りして淋い事でござんせぬか。」　お千「れ百殿の

仰せの通り、御上ゞ長の御病氣ゆゑ、御下屋敷は御庭も廣く、四季の眺めの花咲けバ御氣晴しなり、御病氣の御爲よ成らうと、淺井樣の御計ひにて御出養生。」

お万「御部屋樣い取分て御上の御惱を苦になされ、淺草寺の觀音へ此炎天の御厭ひなく祈願の爲の御日參、」　お百「昨日は御下向の途すがら、入谷とやらより朝顏の花いろ〳〵の鉢の數、我君樣の御眺めよ」　お千「献上ありしを奥樣が、夕のげ待ぬ不吉な花と、以ての外の御立腹。」　お万「日頃柔和な御へ部屋樣も、朝な〳〵に咲かへて、盛り久き此花を、不吉との仰は心得ませぬと」　お百「仰せられたを奥樣い慮外と御叱遊バして、御上の御目よ入れぬうち」　お千「捨てれしまひ遊バした が、今夜の螢の御遊も亦奥樣のあらしにて」　お万「吹飛されるでござんせう。」

お百「ほんゐ妾と本妻い」　お千「犬と猿とで」　三人「御座んすなア。」　と合方きッとりとなり、下手橋掛より小性菊野、女小性にて雪洞を持ち、後より小性駒野、同く女小性にて螢籠を持ち出來り、　駒野「皆さん夫にお出なさんすか、螢ゞ捕たら御庭番の詰所へ持なさりませ。」　菊野「最早夜風の吹く頃ゆゑ、駒野樣の此螢も御持なされて下さりませ。」　駒野「年端も往かぬ私しゞ申す迄でもござんせぬが、

必ず噂や陰語を。」　菊野「言ふとのではござんせぬぞえ。」　侍三人「はアい。」と氣味の惡いといふこなしよて橋掛へはいる。四たりに思入あッて、駒野「菊野樣と私しい稚な馴染の手習傍輩、いつ〳〵までも兄弟と思ふて私い居りますが、貴女い何と思召ます。」　菊野「私しとても同じ事、御長屋とても御隣だから、稽古も一所御奉公も一所に上ッて、此樣よお睦しく致すもの、不束ながら此末とも妹と思ふて下さんせえなア。」　駒野「夫でい今でも兄弟と思召して下さんすの、お嬉しうござります。……　夫よつけても菊野樣何うぞ貴女の御分別を御聞せなされて下さりませ。」

菊野「なに私しよ分別とい。」と合方きつぱりとなり、思入あッて、駒野「さア申すも心苦しけれど、我君永の御病氣にて、典藥の衆も種々御藥湯を差上るに少しの驗も見えぬのは、御疳が次第に募り來て、今にも知れぬ御容躰と承まいッて驚きました。今萬一の事あれバ御世子とても在さぬゆゑ、忽ち御家い御斷絶、夫ゆゑ兄の助之進も心を碎いて、叔父君の和泉樣と御順養子に遊すやうと申し上ても御採用なく、夫のみか度重なれば御目通りを遠けらるゝ其悲しさ。是と申すも御部屋樣が淫酒を勸め奉つり、御衰弱をも顧みず我が贅澤に日夜の御酒宴、お可愛さう

なは御前様、たえ一人に御寵愛を奪はれながらも口惜いとは少しも思召されずに、信實籠る御意見を遊バす度に、御部屋様直御暇を願ひ出るので、募り勝なる御疳性忽ち御氣色荒立て、下々でさへせぬ程の踏だり蹴たりの御折檻、夫れをぢッと御辛抱遊ばす御胸を御察し申せバ、御痛はしいやら口惜やら、私や胸が裂ますやうにござりまする。」と涙ながらいふ。菊野も思入あッて、菊野「私しとても朝夕に募る御部屋の御不行跡困ッた事と思ひまする。是といふのも父様が御推擧なされたからの事、假染ながら親と子の縁を結んだ御部屋様、血脈はなけれど私しにも姉同様な間とて、蔭へ廻ッて御意見も申しましたが人前ばゝり、いつかな止ぬ御行跡、私しとても只今でい何故父上が御意見を申して御暇の願ひをばお上なさる事ぢややらと、夫を恨んで居まする。」駒野「貴女い誠其御心なら私に加勢をして下さんせ。」菊野「なに貴女に御加勢とい、」とぢッと思入あッて、駒野「御家の爲にならぬ御部屋、女なゞらも忠義には男子に劣らぬ心い鐵石、今御家中の人々も權威に詔ひ榮利に阿り、誰とて御部屋に指をさす人もなければ、政道に私しあるは定のもの、嫩のうちよ芟ませねバ斧を用ふる道理ゆゑ、御家の爲に一命を棄て御部屋

を殺す心。」菊野「えゝ」駒野「さア其驚きい理道なれど、匹夫野人の娘でも君の思ひのかゝッた御部屋、此方い女の細腕ゆゑ若し仕損じまい物でもない。其處を思ふて御加勢をお願ひ申すとこゝの事。」ときッといふ。菊野ぢッと思入あッて、菊野「假そめなれど兄弟の義を結んだる私しの心よ曇りのない潔白……駒野様きッと御加勢申しませう。」と、駒野はろりとして、駒野「もし菊野様何にも申ませぬ。」菊野「現在親が推擧した御部屋を殺すを私しに御明し下さる貴女の御心、夫が嬉しいバッうりに御同意申した上からは、今宵盛の御宴を幸ひ、」駒野「おたえを御庭へ誘ひ出し、女の腕も一念力、」菊野「岩をも徹す重代の守護刀で只一ト刺。」駒野「あもし……必らず人よ。」菊野「合點でござんす。」と兩人吁き合ふ。此時上手座敷より侍女一人出て、侍女「もしれ二人さん、只今御前と奥様がこれへれ出でござりまし。」兩人「はゝ」惚りして、駒野「そんなら御前と奥様ゲ是へ御出遊しますか、能う知らして下さんした。」菊野「知らずよ居たら今の咄しを、」駒野「あこれ」と押へる。此時籠の内にて、美作「誰あるか簾を上え。」駒菊「ハッ、畏まりました。」と琴唄になり、左右へ別れて簾を卷上る。内に小森美作守看流病中の拵へにて袒の上に住居、傍よ奥方山吹御

前、奥方の拵へよて住居、下手に淺井内匠繼上下にて扣へ、後よ袴小性住居、前に酒道具よろしくあり。此時仕掛にて軒先より庭へ螢飛ぶ。二重上下に雪灯附の菊燈臺あり。」美作「實にや草木鳥蟲とも、四時の時を違へずして、池に菖蒲の咲比い、庭に飛かふあまたの螢、」山吹「闇い一トしは光りもよく、誠に砂子をまきし如く美事な事でござりまする。」内匠「御上屋敷と事替り、梅や櫻いふも更なり、來鳴く鶯時鳥、わけて勝れし御庭の螢、倦ぬ眺めでござりまする。」駒野「今日の御供を致しまして、」菊野「私し共もとも〳〵に、」侍女「よい樂しみを」皆々「致しました。」美作「螢を肴に一献酌ん。駒野酌いたせ。」と大盃を出す。駒野「はッ」と駒野うつむきしまゝ扣へ居る。美作「菊野酌致せ。」菊野「はッ」と同じく猶豫する。美作「兩人なぜら何故致さぬ。奥酌致せ。」山吹「御病氣の御身ゆゑその大盃でい、」美作「えゝ面倒な、内匠其方酌致せ。」内匠「奥様の御仰の如く御病中ゆゑ、大盃姑らくお置き下されませう。」美作「またしても諫言立、然らば誰にも酌い頼まぬ。」と銚子に手をかける。此時下手にて、長田「あいや其御酌助之進夫へ參ッて勤まする。」と、皆々惚りして、菊野「彼の聲い、」内匠「長田どの。」と合方よなり、下手橋掛より御師範役長田助之進、

繼上下よて出來り、二重に住居平伏する。美作「誰かと思へば助之進、奥を始め是なる者ども、余が意に背きて酌を致さず、不興よ存じ居ッたる處、其方が參ッて祝着致す。」長田「畏れ多き事ながら、奥様始め方々も御意を背くは無禮でござる。抑も今夕の御宴と申すは、君御病中に渡らせ給へば、其御氣鬱を散せん結構、酒宴の料を供へながら、御酌を辭ひ御疳を募らす以ての外の事ならずや。老功といひ物事に御如才のない内匠どの、御手うら水が漏ましたナ。」と思入にていふ。美作「車胤が學びを助けたる火影をおとす此大杯。」長田「御酌を致す其前よ、憚りながら御毒味を拙者に仰せ付けられませう。」美作「謹み深き其方とて、未だ酒量を知ざりしが、美事これなる大盃にて、」長田「彼の長鯨が百川を吸ふよ等しき拙者が手際、」美作「ふむ美事飲めるか。」長田「造作もござらぬ。」と大盃を取上る。内匠滿々と酌をする。皆々氣のもめるこなし。長田「心地よき此香をり。」とぐッと一ト息に飲み干し、思入あッて盃を泉水へ投る。是よて美作むッとして、」美作「やァ慮外なり助之進、余が授けたる杯何故あッて投たるぞ。」長田「異な香が仕つりました故、」美作「粗忽を掩ふ其一言、手討に致す夫れへ直れ。」と始終疳にて慄へながら佩刀よ

手をかける。長田「いや御手討ち面白い、某劔道の師範は致せど、人を切たる事もなく又切られたる事もござらぬ。其御佩刀ハ三條宗近、御先祖三左衛門公數度戰陣に御用ひあッて、功名手柄を遊したる世にも稀なる銘刀なり。助之進が此太首只一ト打ようッ放して御覽なされ。」とずッと居直る。山吹、内匠、皆々美作を止て、山吹「下し置れし杯棄ましたのは助之進ゞ無禮でハござりますが、酒興の上ゆゑ此まゝに、」美作「ならぬ離せ。」内匠「今宵の處ハ御勘辨下し置れたうござります。」

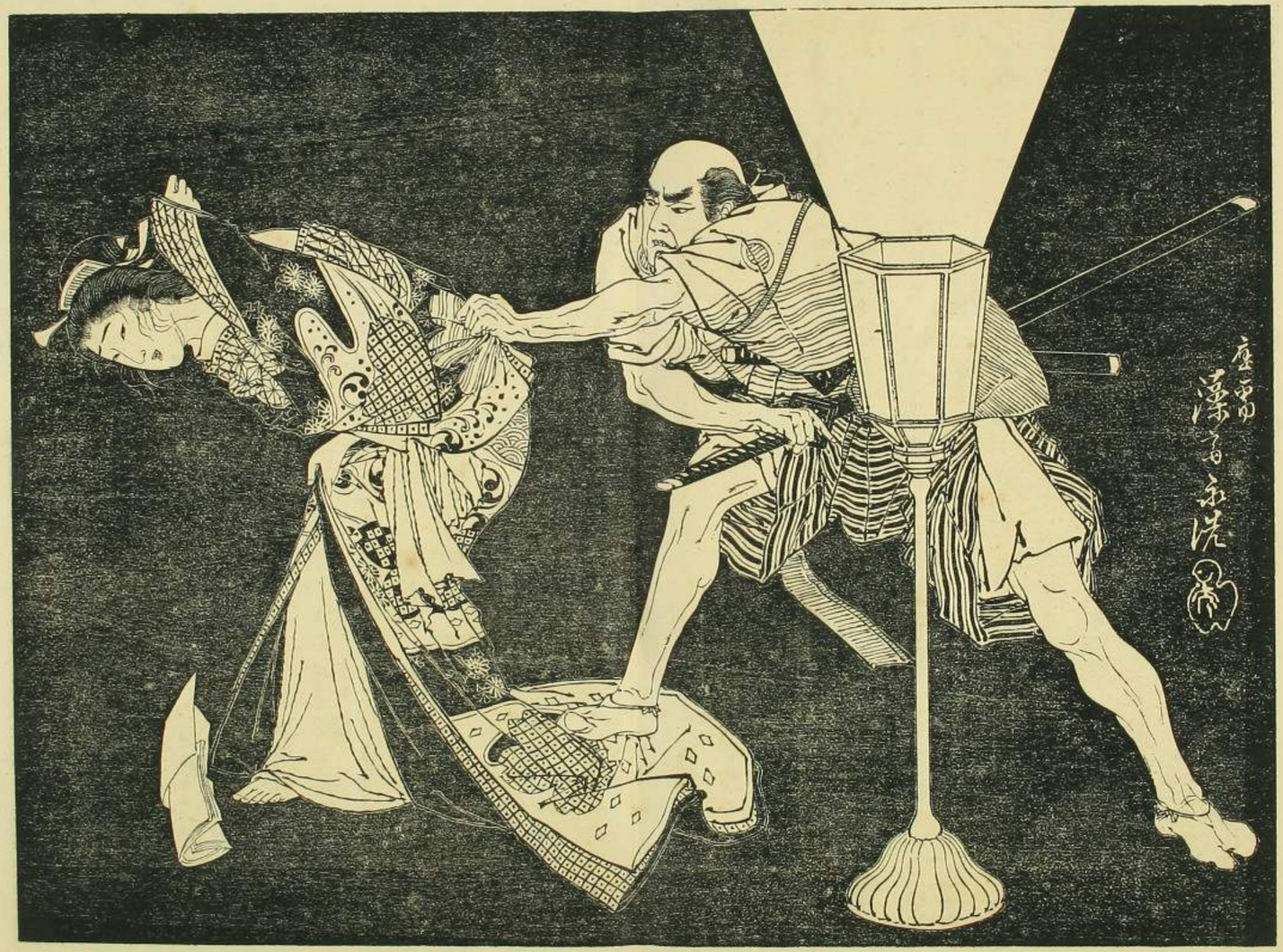
美作「いや〳〵成らぬ其處放せ。」山吹「御疳の性とハ言ながら、少し御心落着て、」内匠「御賢慮願ひ奉ります。」美作「放せと申すに放し居らぬか。」ときッといふ。内匠思入あッて、内匠「是非に及ばぬ、駒野ゞのこれ娘、早く御部屋を」菊野「はッ」と下手椽側傳ひには入る。跡放せ放さぬと爭ふ處へ、廻椽よりおたえ好みの着つけにて侍女二人、駒野、菊野つき添ひ出來り、此体を見て直と二重へ入る。たえ「またしても其樣に仔細もない事腹立て、また御病氣に障りませうぞえ。助之進が何やうな無禮を致しましたかハ存じませぬゞ、私しに免して今夜ハ御勘辨何うぞ成されて下さりませ。……もし」と無理に押据る。美作「了簡ならぬ奴なれど、

外ならぬたえゞ執成、……うゝよいは今夜の處ハ許して呉る、目通り叶ぬ罷り立て。」山吹「如何なる事に成り行くかと安き心もなかりしが、」内匠「御部屋樣の御執成よて事穏便に濟ましされば、」駒、菊「一同安途致しました。たえ「みんの御禮に及びませう、是が御前の御病氣ゆゑ、能う覺ゑて居なさんせ。」内匠「何は然れ長田氏、一先御前をれ下りなされ。」長田「いやいつゝな此座は立ちませぬ。」美作「退れと申さバ退り居らぬか。」と合方きッぱりとなり、思入あッて、長田「近頃新しからぬ事ながら、君文武に御心深く、仁義を旨とし給ひしよ、當春以來妖婦を愛し、日夜淫酒に耽り給へバ、表に御衰弱ハ顯ハれねど、脆きハ飛交ふ螢火の大風を待つよ異らぜ。若し不幸にして御他界あらば、御先祖代々榮えたる御家は忽ち闇夜とならん。然ある時には御累代は御不孝のみに止らず、上へは御不忠、御家臣へハ不仁の君となり給ふん。肩ならぬど助之進叨りに君寵被れバ君を慕ふ親の如し。うるゞゆゑに心を碎き御慍りも顧みず再三御養子の義に就まして御諫言も申せしかど、如何ゝ御聽遊れぬは賢き君にも似合ぬ御心、何卒早く老若を國表より召上され、評議を凝して御側を清め、先づ御世子を定めさせられ、靜よ御病氣御保養あッて、一

藩中の人心取鎮める御賢慮を御運し下し置れませ。」山吹「當御家い關ヶ原にて軍功とても薄からず、二代様より御諱の片字を下し置れました御縁もあれば、傳手を求め典藥頭通仙院延壽院の両法印に御脈体をも伺せしに、心にかゝる御容躰、今より酒色を遠ざけて御服藥を遊さねば、御大切よも及ばんと申せし時の其の悲しさ、心盡しの効もなき日毎夜毎の御亂酒い、何卒今夜を限にて御止めなされて下さりませ。」と兩人諫言よろしくあり、れたえ思入あッて、たえ「おゝ爾うぢや。」と佩刀に手をかける。美作これを止て、美作「何故其方は自害を致す。」たえ「此御佩刀で死ますれば御手に罹るも同じ事、何うぞ放して下さりませ。」美作「汝が死なうと致すのも、奥の詞を氣よかけてゝ。」内匠「仔細も言はず御自害とは、御部屋よも似ぬ御短慮千萬。」美作「仔細を是よて包ます申せ。」と佩刀を取ッて脇へ置く。たえ「さても死ぬにも死なれぬか。はァ」と泣き入る。美作い氣のもめるこなしにて、美作「心得難き其方が振舞、疾々仔細を語り聞せよ。」たえ「其御優しい御詞が此身の胸へは劔の針、切ない心の一通り御聽なされて下さりませ。」と合方になり、思入あッて、たえ「今長田様の御詞といひ、また奥様の仰せといひ、妾が

淫酒をお進め申し御家を潰すか何ぞの様よ仰やる故に、一旦い永の御暇を願いうと思ひましたが、お耻もじあゞら御館へ上ッてより三月此方身體の狂ひ胸苦しさに、奥醫者へ内々頼んで診て貰ひ、君の御胤を含したと言いれた時のその悲しさ、妾が身重と聞れたら、今までかゝッた恨みも百倍、針の筵に居るやうに其方此邊にちく〳〵と衝突ものがございませう。併し大事な御胤を心含した身をも投られず、ぢッと辛抱しますのも御腹の御胤の太切さ、今となッてい若君ゞ御誕生でも、奥様や御家臣方の憎しみで、迚も御代には立られまいと思ひ詰ての今の覺悟。御察しなされて下さりませ。」と空泣をする。美作い嬉しき思入よて、美作「なよ余が胤を含したとう。……然らば内匠其方一命に引受て粗匆なきやう守護致せ。」内匠「始めて存せし御懐胎、身不肖ながら安々と御平産ある夫までは、屹と御守護を仕ッてござります。」たえ「あいた……」と胸を押へる。美作「たえ如何致した。」たえ「心遣ひなせし故か、俄に支へが起りまして」美作「余が胤舍せば大事の身體、奥へ參ッて服藥致せ。」たえ「難有たうござります。」内匠「大事の御身にござりますれば、御意に任せて御部屋にい」たえ「奥へ參ッて養生致せば、御免なされて下さり

ませ。」　と唄になり、おたえ思入あッて助之進を尻目よかけ奥へはいる。迹よ助之進思入あッて、長田「又御怒を増ますゝ存じませぬが、御病中の御胤なれバ御肥立の程も定りでないものを、はや若君の御誕生ありたる樣に思召すは甚だ以て御不覺なり。夫より一先叔父君御順養子と御定めあらバ、御家い愈よ安泰ならん。」山吹「不吉を願ふにあらねども、轉ぬ先の杖とやら、こりや助之進が申すやう。」美作「やア奇怪なる其一言、無益の諫言聽く耳持ぬ、退り居ろ。」長田「良藥口よ苦きの譬へ、只諂ひよ媚諂ふ佞姦邪智の白漢が甘き詞よ惑れ、此宗廟い何となさるる。」美作「舌長し助之進、余を調伏致す所存か。」長田「全く以て。」美作「えゝ不忠者めが。」　と立蹴に蹴る。是よて長田泉水へ落る。美作「罪科に處すべき奴なれど、慈悲を以て暇を遣ハす。早く邸を退散致せ。あゝ折角の螢の宴も邪魔嵐に吹散された。座敷をかへて飲直さん、内匠參れ。」　と唄よなり。席を蹴立て内匠附添奥へもいる。奥方庭にうつむき居る長田に思入あッて、駒野菊野侍女附添ひ奥へもいる。跡合方にて能き程に長田顔を上げてぢッと思入あッて俄かに氣をかへ、うムどうなづくをきッゝけに、早き合方よて泉水傳ひに庭の方へはいる。本釣鐘



をうち込み、誂への獨吟に成り、獨吟「待宵の閨のそら燻いたづらに、小夜風しのぶ片折戸、」と奥より以前のれさえ、少し酒に醉たるこなしにて出で來り、たえ「あの園さん何故遲い、あれ程堅く約束して、忍ぶ路までも敲へさのに、ほんに待身いしんきなものぢやなァ。」と獨吟二の句になる。「開けて言されぬうやむやの關は空音にあくるとも、詫しき床にうたしきて夢安らはぬ青嵐、」「もしや夫かと轟かすあらうらめしの五夜の鐘の音。」と、此内れたえは鬢のほつれをかき上げなどして園二郎を待つ思入、よろしく獨吟の切れに。又本釣鐘を打込み、橋掛より以前の助之進、高端折帶刀にて忍び來る。れたえい園二郎と心得て嬉しき思入。たえ「今も今とて御前の噂、人をぢらすも程のあるもの、」長田「愚鈍や自ら語るに落る妖婦の性根見屆たるぞ。」と、おたえ悔りして、たえ「やァ園さんと思ひの外、お前は長田助之進。」と逃んとするを引つけて、長田「汝の情夫園二郎より素性は聞て存じ居る。御家の御爲助之進が汝の命は貰ッたぞ。」ときッといふ。誂への合方みなり、たえ「なよ大切な御胤のある私を美事殺す氣か。」長田「夫も素性の知れた懷妊婦め。覺期」と刀を拔く。おたえ逃やうとして行燈を消

す。是れまて知らせなしに道具半廻しとなり、仕掛にて螢澤山飛ぶ立廻よろしくあッて一刀ゟ切下、おたえの倒れるを待ち、懷へ手を入れて探る。懷妊でなきゆゑ吃驚してどうとなるを道具替りの知らせ。尙も探り見る思入。早き合方にて道具廻る。

本舞臺一面高足の土手、眞中に上り下りの段、上手に柿葺葭簀張の編笠茶屋の後を見せ、下手樹木の張物にて見切り、平舞臺上の方蓮田一面ゟ蓮の葉花をあしらひ、後黑幕、總て吉原より山谷へ出る土手下の体。土手の上に廓廻りの夜商人二人、荷をおろし立掛り居る。土手馬の馬士烟草の火を借て居る。此馬の上ゟ軍太夫、羽織、着流、大小ゟて乘居る。此見ゑ廓の騷ぎ唄にて道具留る。

商人甲「今大門ゟら出て來る時ゟ會所ゟ大勢人が居たゞ、何ゟ變でもあッたのかね。」

商人乙「慥かな事は聞なんだが、金杉あたりの屋敷の者が妾を殺して逐電したので、町方衆が追込の手當に出張て來たのださうだ。」馬士「夫では御武家の客人は調ゞあッて喧ましからう。」　と軍太夫にかけて言ふ。軍太「身共ゝ怪しい者ではないぞ、町方でも馬士でも一向頓着仕つらぬ。」馬士「旦那の樣な立派な御武家に身暗い事はでざりませぬが、もウ中引を過ましたゟら馬ゝ明てお貰ひ申したうでざります。」

軍太「是まで參れバもウよし原、駄賃と酒手を遣わすぞ。」馬士「是れゝ難有うでざります。」　と軍太夫馬より下て懷中より金を遣る、軍太「時ゟ物が尋ねたいが、髭の無休とか名乘る俠客、當廓へ參るよし承まいッて是まで來たが、其方共ゝ存じて居らぬか。」商甲「髭親分ででざりますか、髭親分なら子分を連れ先刻七軒へ見ねましたが、」商乙「昨夜三谷の親分に下駄を頭へ乘せられた」商甲「其仕返しも町方の出張がありては贅だゟら」商乙「もウ歸られるか知れません。」馬士「親分さんに御用なら、急いでお出なされませ。」軍太「夫ゝ千萬忝けない。」　と懷中物を懷へ入れる時、一通の手紙を土手下へ落す。馬士「旦那何うも難有うでざります。」軍太「太義であッた。」　と前の騷ぎ唄にて軍太夫は土手越に上手へ、馬士、商人は下手へはいる。跡時の鐘凄みの訛への合方ゟなり、森の中より以前の長田、着流尻ゑしより、大小にて出る。向ふへ三谷の助六、男達の拵へにて出來る。是と一所に東のあゆみへ不動の吉三同じく男達の拵へにて出來る。舞臺向ふ花道一所ゟ留り、助之進「我十歳にして召出され、劒道修行ゟ廻國して一刀流の極意を究め、身に高

祿を賜りて御師範役を承はりしに、淺井内匠ゞ姦計にて君を淫酒に導きまゐらせ、國家の危急默止難く、御意見申せゞ御聽入なく、御目通を遠ざけられ御勘氣の身となりし故、亂の基たる妖婦おたね、無謀と知りつゝ一刀に打て邸を立退しが、」助六「思へゞ男も愚痴なもの、根もない喧嘩の意地づくから、毎日絶ねえ立入が積り積ッて暖簾よなり、三谷の助六助六と名前を賣た表商賣。」吉三「此方も俠客の片端に指を折れて不動とか、まさ吉三とか立られる男を見込で頼まれりやア、骨が砂利になるまでも、跡へは退ぬへ旋毛曲、血潮をすゝッて義を結び、生死までも一所よ誓ひを立た兄弟が、」助之進「昨夜駒野へ敎訓の序に諭した武士道の果敢なき事は、今ぞ知る身の成る果も約束事。」助六「斯なるからにゝ何處までも、命をかけて此方から出入を買ひに出て行のも、俠を研く稼業の意地。」吉三「今日は互ひに敵となり、此方が頭を割られるか、向ふを割るゝ運だめし、伊達には持ねゝ一節切。」助之進「操正しき奥様が御無念とても是にて晴れ、固より賢き我君も先非を悔み遊さん。夫れを一期の思ひ出に、」助六「併し女房や子にばかり、苦勞をさせるが不便だと、心は着も止られぬ血の氣の勝た性質。」吉三「何うでも命の遣取が濟ざア市が榮

えめえ。」助之進「覺期ゝ固より決したれゞ、國より老職上府して御家督極る夫までは死するに難き我が一命、何卒首尾よく身を忍ばん。」助六「言はゞ大事な嚊勝負、敵手の髭が歸らぬうち、」吉三「命の瀨戸の大門口、」助之進「雨もつ闇を幸ひに、」助六「どれそろ〳〵と」三人「行かうかい。」と右の鳴物にて長田は下手へ、助六吉三ゝ本舞臺へ來り、長田、助六に突當る。恂りして上手へ行き、吉三に突當り、三人きッと見え。時の鐘、廓の唄へ紙礎を冠せし誂への鳴物になり。此時堤より駒野、女小性の拵へ、其後より軍太夫、以前の手紙を探る心にて出來り、だんまり模樣よろしく。どゝ軍太夫は助六よわたり、花道すッぱんの處にて腰よかゝる。是にて助六印籠を落す。好き見えよて後の黑幕を切ッて落す。向ふ見返柳、高札場、吉原の屋根を見たる書割の遠見になり、五人だんまり模樣よろしく、軍太夫は長田よかゝる。當身よて軍太夫美事かへッて蓮田へ落る。是れにて長田花道へ逃る。駒野前の手紙を拾ふ。助六これを引つける。吉三下手にて向ふを見込む。駒野手紙を透し見る心にて、駒野「やゝ深尾十郎左衛門どの淺井内匠。」此内軍太夫蓮田より上り、泥まぶれよて、軍太「夫を」と助六よかゝる。助六直と捻上る。

吉三「曲者」是よて長田石の心にて印籠を礫にうつ。吉三是れを受留める。助六、軍太夫をまた蓮田へ投る。双方見合て一時ゑ木の頭、引張廓の騒ぎ唄へ寺の鐘を冠せ、柏子幕。　と幕引附る誂への合方ゑて、長田向ふへ急ぎ這入る、跡ゑやンさり。

二幕目

金龍山仲見世の場

三谷助六住家の場

本舞臺上の方石の鳥居、此向ふ石段石の玉垣、石段の上山門樹木茂りし書割、眞中より下の方一面に家體、一間の入り口金龍山名物米饅頭と染し紺暖簾、續いて荒き千本格子、前に床几二三脚あり、都て待乳山石坂下の體。双盤にて幕開く。　と直に唄入り賑かな鳴物になり、上手より待乳山の茶屋女、阿瀧、阿若、阿梅、阿鳥羽、阿蝶はでなる好みの浴衣揃ひの前掛にて、團扇を持ち出來る。下手より金龍山の小性橘彌壽彌、兒富貴丸、幸丸、いつもの着つけにて出來り舞臺よき處へ並ぶ。

お瀧「梅咲く春の四方の空、淺黄に染る早緑の、」　橘彌「草萌いづる初霞、かゝる景色にすみだ川、」　お若「彌生の櫻をり挿、入相告ぐる鐘の音に、」　富貴「散て越來る夕涼、梢ぞ去づむ山谷濠、」　お梅「乘込む舟の川風に、簾を卷や月今宵、」　幸丸「富士と筑波を西東、浮寢の鳥を辛さらば、」　おとは「友に明さん庵崎の、去るしの柳冬枯れて、」　壽彌「春に知れぬ花ぞ咲く、實や千里の銀世界、」　お蝶「復來

る春を待乳山、木々の注連縄神寂て、」　お瀧「四季に見あかぬ、」　皆々「眺ぢやなァ。」　と一順して床几に掛る。前の合方にて向ふよりかんから虎、阿房鬘一本ざし男達にて出來る。後より序幕の緋日商人重兵衛、半纏、半股引、草鞋穿ゐて出來り、　重兵「もし其處へ行ッた、やるのい、髭親分の内の衆ぢやござりませぬか……もしお前いかんからの虎右衛門さんぢやござりませぬか、少し用のあるものでござります、お待なすッて下さりませ。」　と呼ながら本舞臺へ來り、重兵「おゝかんから樣だ、虎樣だ、見た處から強さうだが、御住居が本所か、若いに似合ぬ遠いお耳、　虎右「先刻にから呼バッたやるのは爺さんか、見れば薄穢ねえ形をして、己に何の用があるのだ、」　重兵「用ゲあるから聲を嗄らして先刻にから呼だのさ。」　虎右「呼だのが耳障だ、先から先と賣て〳〵千里を走る虎右衛門、用ゲあるならさッさと言ねえ。」　重兵「いやいつ見ても奴衆は元氣ゲ能くッて勇しい……まァれ掛なされませ。」　虎右「立跨かッても居られめえ、掛ろと言やァ掛けて遣らァ。」　と、此時お瀧少し床几を脇へ寄る、虎右衛門ずッと端へ腰をうけ、見事よ轉ぶ。　お瀧「親分何となされました。」　お梅「何處もお怪我いざりませぬか。」　と皆々笑ふ。虎右衛門面を去かめて起上り、　虎右「あいたゝたゝ、」　重兵「痛い處から太ります、まァ御辛抱なされませ。」　虎兵「口の減らねえ爺めだ、用から早く片付ろ。」　重兵「用といふのい外でもない、お前の親分無休樣に、何うぞ逢しては下さりませぬか。」　虎右「なよ親分に合はして呉ろ……大方喧嘩の尻押をして貰へてえといふのだらうが、近頃喧嘩が立込で、直にいちッと請取れねえ。今日も是から助六と己が出會の嚊勝負、男と男の立入を、冥土の土産に見て往きねえ。」　重兵「助六さんとお前さん、言ずと知れた鷲に鳶、見ぎとも勝負は、」　虎右「何うしたと。」　重兵「勝負い時の運ゆゑよ、侮らぬやうなされませ、」　虎右「此奴中々食へねえ爺だ、去て親分に賴みといふのい、」　重兵「お前が喧嘩の敵手になる助六へ詮議の一條。」　虎兵「何しに三谷の詮議をバお前ゲ去にやァならねえのだ。」　重兵「去る御方から賴まれて、些と詮議をして貰ふ事ゲあれども、私にい何うせ手の出ぬ敵手い助六、向ふに廻るい江戸中に親分より外ござりませぬから、夫れでお願ひ申しますのさ。」　と此時上手より、　無休「どれ夫れへ行て休息去やうか。」　重兵「やァあの聲い、」　虎兵「己ゲ親分髭の無休さまだ。」　と賑かな出

の鳴物に成り、上手より髭の無休、白髪撫つけ好みの着つけ、道服大小にて出來り、直と上手の床几に住居ふ。　橋彌「先刻坊へ見えられた無休どの、」　壽彌「もウ御下向で」　富貴幸「御座りまするか。」　無休「金龍山の僧都に頼みし勝利の護摩も濟だゆゑ、これまで下向を致してござる。」　重兵「噂に聞た髭の無休様ハお前様でござりますか。」　無休「いかにも身共ハ髭の無休、夫れを尋ねる此方さんハ、つひぞ見た事のねえ人だが、」　虎兵「親分の知らねえのハ當然だ、此の爺さんが先刻にゝらお前ゑ會ッて助六に何ざか詮議が去て貰へてえと私まで達ての頼みなのだ。」　無休「ふム助六ゝ詮議といふのハ何樣な事だか、品よよッたら命にかけても引受けまいものでもないが、仔細を話して見さッせえ。」　重兵「へえ有難うござります私しハ御覽の通り緑日稼ぎの植木賣重兵衛といふ者でござりますが、親分さんとハぞッこんの淺井樣から言つかッて、長田助之進といふ武士の在所を探して居りました處、昨日ちらりと助六の家に匿れて居る事を聞きましたので、早速ゑ淺井樣へ御知せ申すと手紙を書て私に渡し、是れを以て親分へ詮議を願へと仰やりました。何うぞ親分引受けて詮議を遂て下さりませ。」　と懐中より一通を出してよ

ろしく頼む、無休手紙を披き讀む事あッて、　無休「委細の事ハ呑込だ、長田ハ重なる恨みのある奴、ちッと此方も見込もあるゝら安心をして居さッせえ……爾ういふれ前ハ何ういふ緑で淺井を知て居なさるれざ。」　重兵「何を匿し申しませう元私しは魚賣で小森の邸へ出入をして、淺井樣とは御普代の家來のやうにして下さるので、此方も主人を見るやうゑ親しく出入を去て居りましたゞ、此性根玉ゞ御氣に入たか御手のついた端女を腹の子ぐるみ引取て女房にしてハ呉れまいか、其代にハ三人扶持生涯其方へ賄ふとれ頼みゆゑに夫を引取り、男の子どもを産落して育た代りに其倅ゞ　お六といふ者に拵へゑ子を淺井樣ゞまた引取て御世話を下され、重なる緑に何事も御用を勤めて居りますよ。」　無休「偖ハ爾去た譯であッたか、種を聞ちやァ萬更の赤の他人といふでもなし、妾殺しの科人は己ゞきッと調て遣らう。」　重「夫で此方も落着きました、親分有難うござります。」　無休「何の禮にやァ及ばねえ、元ハ身共も小森の藩中、二刀流と一刀流の爭論ゝらして助之進と晴の勝負に思はぬ不覺、夫ゝら邸の暇を取り寛襦の統領髭の無休、頭巾を脱ぎやァ深尾十郎左衛門といふ一流極めた武士だ、二言はいはねえ見て居

なせえ。」　虎「頭ゞ一旦受合ちやァ親船へ乗たも同じだ、氣を大丈夫ゑ持ッたがいゝ。」　重「何分お頼み申します……夫ぢやァ親分、」　無休「氣をつけて歸らッせえ。」と合方ゑて下手へはいる、跡茶屋女、小性、皆々立つて向ふを見込み、　お若「われ〳〵向ふへ唐人の、」　お梅「耳の垢取ゞ來ましたゝら、」　富貴「無休どのも、」幸「虎どのとやらも、」　おさは「垢を取して、」　皆々「お遣んなさい。」　無休「なゑ紺屋町の長官ゞ參ッたゝ。」　虎右「己らの耳い地獄耳、蟻の呰ぎ蝸叫の内所話しも聞えるゞ、親分いきつい逆上性、耳の療治をさせなせえ。」　無休「卑怯な敵手をべんべんと待て居るのも退屈だ、耳でも浚ッて待うゝい。」　お瀧「紺屋町の長官さん、」　お蝶「急いで是れへ」　皆々「御座んせえなァ。」　と合方ゑ唐人囃子を冠せたる鳴物ゑなり、向ふより耳の垢取長官、唐髪、むけ髭好みの唐服にて腰へ瓢を提げ、手に耳かきを持て出來り、　長官「呼りましたは此方様か、耳一切の療治なら耳かき一本七加減きッと直るゞ秘法の傳授、」　虎「藥能書はど利ずと味噌を上げても其手い喰ねえ、頭の御用だ早く來い。」　と右の鳴物にて長官本舞臺に來たり、長官「利くか利ぬい後での御試し、江戸で長官京で一官、唐人越の九兵衛と申すい

京と江戸との渡りもの、元祖根原我等ゞ療治い長崎傳來紅毛渡り、一ぴ耳を浚ふ時い雀の寢話がいッきり聞え、二ぴ掃除をする時い越路の雁の痴話が聞える。風の斬きや雷の小唄なげ節何のその、然れば神田で紺屋町の長官とお尋ねわれば、醫者も及ばぬ外道不可思議、近うお耳を出されませう。」　と思入あッて虎の耳を強く掻く。　虎「やい〳〵命のゝけ替があるゝ知らぬが此ゝんからの順風耳、いやゝんからかん〳〵鳴るい〳〵、鳴るい瀧の水日い照るとも絶ねず擽々ぞう〳〵。こりャもゥ堪らぬ免せ〳〵。」　と虎兩手ゑて耳を押へぞうとなる。　長官「もし其方の御客さま御掃除を致しませうか。」　無「和らかゑ致して呉りやれ。」　長「畏まりました。」　と療治ゑかゝる。此内無休い耳が聞えぬこなし。長官四邊へ思入あッて、　長「もし御女中衆、若し此邊で十七八の御嬢樣を見かけいなされませぬか。」　お瀧「其御女中と言ひなさんすは、若しや眼のぱッちりとした色の白い品のよい御屋敷さんでいでざんせぬか。」　長「ふゝ何うやら私の尋ねる人も今の話しが似て居るやうだ。」　お若「夫なら前の月末から此の麓屋の娘分ゑ成んなさんしたお米さんが、」　お梅「若し其人でいあるまいゝ、尋ねて御覽なさんせえ

な。」　長「お蔭で何うやら手がゝりが……いや是い有難うございます。」　と耳かきを抜て背中をぽんと叩く。　長「いゝ氣持でございませうな。」　無「大きに逆せゞ下ッたやうだ。して代料い如何程だ。」　長「些と先を急ぎますからまたお序に戴きます。」　とよろしく思入あッて上手へはいる。無休耳を撫て見て、無休「淺草で耳を浚ッて時鳥。はて夕風い別なものだ。」　と是にて誂へ簾内の一中節になる。　一中「いで其ころは秋の夜の月は隈なき武藏野に影ぞすぐれし男郎花盛りい人も花なれや、合「花にゝくれぬ匂ひこそ江戸一番の助六ゞたもとも胸もひろ〳〵と光すゞしき伊達浴衣。　と文句よろしくあッて向ふより三谷の助六、好の單物一本ざし一つ印籠にて出來り、花道よき處ゑ止る。　橘彌「今日は參詣晩き故、」　富貴「御坊もきつい御待かね、」　幸丸「私しぞもに見て參れと、」　壽彌「仰せを受て此處まで、」　橘彌「れ出迎ひを」　皆々「致しました。」　助六「御丁寧な御挨拶、心の願をかけ額に誓ひを建た日參の、日並も丁度滿願結緣、三七日の日護摩を上げ御禮參りを待乳山、見れゞ御坊の御小性と孰れ劣らぬ姉達、こいつァ大分話せるわえ。」　お瀧「またしても助六さん、」　お若「嬉しがらせを言なさんして、」　お梅

「人を嬲るも程がある、」　おさは「口で罪を造るより」　お蝶「早う此方へ」　皆々「御座んせなア。」　助六「歸らうと言ても行ざァならねえ。」　一中「いづれ男の魂と研き上たる尺八ゑ心の節の細々と　合「頼もしかりける風情なり。　と又一中節ゑなり、助六本舞臺へ來り、無休へ思入あッて下手の床几ゑ掛る。無休虎と顔を見合せ、いま〳〵しいといふ思入。　橘彌「助六殿の御參詣のよし、」　壽彌「師の御坊へ申上げん、」　富貴「御休足が濟ましたら、」　幸丸「早く御越なされませ。」　助六「只今直と參ります。」　と挨拶して小性兒いづれも上手へはいる。跡女形皆々助六をあふぐ。　助六「團扇車ゑ屏風、夏と冬とが一所ゑ來て、何とも言へぬ心持だ。伽羅と麝香の香を送る風で何うやらむせるやうゞ。」　と無休へかけて言ふ、是れゑて無休勃としたる思入あッて、　無「やい女身共い扇を忘れて參ッた、團扇を一本貸して呉え。」　助「見れゞ立派な武士だが扇子一本ないといふから、意地をよくして姉達團扇を貸て遣んなせえ。」　女形皆々「無休ゑ貸す團扇いお生増でございます。」　と助六思入あッて冷笑ふ。無休、虎いづれも忌々しいといふ思入。爰へ合方になり、上手より米饅頭の賣子梅吉、梅鉢の大紋ある好みの着つけ、朱

紙黒拵誂らへの團扇を持ち、蒔繪の荷を擔いで出來り、　梅吉「こりや淺草に隱れのないお米の饅頭、一つ召上てお見やれ。上ンむッくりむく〳〵として、中ンはッこりと温かで和らで味がようて、餡ン小豆の小豆で御座るン。」　とふり賣宜しく。虎つッと出て團扇をひッたくり、梅吉を突飛す。　梅吉「やい二才め何を去やアがる。」　虎「金堀山の燈火ぢやアあるめえし奥の方で光ッて居ても、日天月天兩眼よ備へた面をぶら下て暮よ間のある西明り、大かい身體の影法師が爺の眼よやア這入ねえう、事も愚や髭組よ千里の藪の竹門育、餡屋がぢてえ己の稼業唐人餡の甘ッたれ、朝鮮餡のぶう〳〵が身を長じけの流れ餡、疾切餡のちやんきりから、かんから虎を知らねえの。」　ときッといふ。梅吉むッとしたるこなしよて、梅吉「垢抜のせぬねきの頭め、ねかしの足ねえ麥もやしが太白煉の眞似をしてもまだ言卿が糠ッ臭えや。先刻神田の長官よ耳を浚ッて貰たから些たア詞が通じやう、武藏國ン江戸淺草、右の眼で五重の塔、左の眼で一天下の御城を白眼で生れた大哥だ。口巾ッたい臺詞だが、光る源氏の饅頭ン餡の甘い御大將、我がもちくちよせいらうあげ、敵の來るのを待乳下、金龍山が地の底へめゐらうが觀音堂が天上

去やうが、元祖の行燈蒔繪の重箱、ひもじか食ねえ米饅頭、此麓屋の店先で猫よも足ねえ下〳〵手書の虎、めッたに尻尾をおッ立りやア、己が旦那の仁兵衛樣より此梅爺やが承知が成ねえ、去なびた腕にも骨があらア、年ン老てもしやんと來いざ。」　虎「生意氣な事を吐去やアがる。」　とかゝるを助六中を隔、思入あッて、　助六「敵手ン高が老人だ、大人氣ねえから麁なせえ……おい爺さん、空威張ン止よして早く商ひに行なせえ。」　梅「ざまア見やアがれ。」　と荷をかついで一散に向ふへはいる。跡合方よなり、向ふより坊主小助、坊主鬘、針抜の摸樣ある浴衣、一本差よて、紅繪賣園二郎、好みの着つけ、紅繪の脊負荷のまゝ袗首を掴んで出來り、小助「さアきり〳〵と失せやアがれ。」　園二「御免なされて下されませ。」　と小助本舞臺を見て、　小助「親分其處に居なすッたか、野郎をしよびいて參りやした。」無「丁度幸ひ此處へ來やれ。」　小助「あい……さア來やアがれ。」　と引立て本舞臺へ來り、　小助「さア下よ居ろ。」　園二「御免なされて下さりませ、只今も申しました通り、堺町ン正本屋十右衛門が賣子の者、惡い事ン致しません。何うぞ御免下さりませ。」　虎「兄ィ其いつア何者だ。」　小「手前ンもウ忘れたのか、舊外廓で乱

暴してぶちのめした青二才、詮議があるから聖天町で會たを幸ひしよびいて來たのよ。」　と是にて無休ずッと前へ出て、　無「やい野郎己が面を見たならば何の詮議をする事か大方心に覺えゞあらう、今となッてい逃さぬから、密訴致した其仔細を包まず是れにて言てしまえ。」　と園二郎ぎよッとして氣を替へ、

園二「密訴とやら擅とやら、其樣な事私しは致しさ覺えいでざりませぬ。」　無「まざ〳〵しい其言拔、生の親と育の親二人の親に沸湯を呑す彼のこゝな横着者め、言てもざァ屹と言して見せる。」　ときッとなる。此時小助、虎、脊負荷の繪を取て女形に遣ッて居る。園二郎い始終ふるへて居る。　無「坊主。」　小助「あい。」

無「かんから。」　虎「あい。」　無「見ゝけに似合ぬ太い根性だ、ぶちのめして言いして見ろ。」　二人「あい。」　と立かゝる。女形皆々氣のもめるこなしにて、　お瀧「あれ園さんが彼の樣ゑ、」　お若「酷い目に逢ひなさんす。」　おと「可哀さうゆゑ助六さん、」　お蝶「助けて上げて」　お梅「下さんせえなァ。」　と助六に取縋る。助六思入あつて、　助六「傍で見るのも不便でならねえ、己が喧嘩は買て遣らうよ、姉達い浮雲ゝら彼方へ行て待て居なせえ。」　お瀧「ゝんなら何うぞ助六さん、」

皆々「きッと跡からお出なさんせ。」　と浮た合方よて皆々下手へはいる。跡助六思入あッてずッと出で兩人を押分け、園二郎を後へ隱す。　虎「また出しやばッて邪魔をそるのか。」　小助「手前の知た事ぢやァねえ、すッこんで居やァゲれ。」

助「人の難義になる事を、　指を嚙へて安閑と見て居られねえが己の氣性だ、見ず知ずの人でもある、ゝいつぞや廓で手前達ゲ蹈たりの其中へ、這入て此方で買た喧嘩、まだそのしらちも付ねえ内に、己をさし置此人を撲のは己ゲ怖いのゝ、いつまで行ても己ゲ敵手だ、指でもさしたら命いねえぞ。」　ときッといふ。

園二郎嬉しき思入。　園二「貴下は山谷の親分さん、難儀になッた此場の始末を、」

助「私が買ッて出たゝらは必ず苦勞にしなさんな。見れバ大分商賣物を荒された樣子だゲ、代は私が拂ッて上やう。」　園二「夫れでい何うも濟ませぬゲ、」　助「いゝから家へ爾う言て、鼻に貫ッて往きなせえ。」　園二「何から何まで親分さん、」

助「禮も後でいつでも言へる、けいぞの出ぬうち早く行きねえ。」　園二「有難うぞざります。」　と拜みながら下手へはいる。　小助「敵手を逃しやァ己が敵手だ。」

虎「助六覺悟。」　とゝゝるを立ち廻つて見事に投る。　助「ちッたァ是れで性根

がついたか。」　兩人「何を」　とまたかゝるを下駄を以て眉間を破る。　兩人「覺えて居ろ。」　と上手へ逃ては居る。助六ずッと無休の前へ行き、下駄ばきのまにて足を無休の面へつき付け、きッと見得。これにて誂への鳴物になり、無「助六手前は何をする。」　助「何をすると知れた事、追剝強盗ぶッたくりの帳元をする髭ッ面、諸人の見せしめ助六が其しやッ面を潰して遣るのだ。」　無「市に下れど武い棄ぬ此の無休が何で賊だ。」　助「知らざァ言て聞せやう、強きを挫き弱きを扶け、道に狂ッた奴原は眉間を破て惡を懲し、無懶の奴は取拉ぎ、天下泰平民安穩、此の大江戸の商賣を守るが男の魂ひゞ。夫に何ぞや廓をゞめき、遊女を苦しめ、通客の妨げをしてのさばり歩き、資本も細い小商人の物を掠めて打さゝく、夫でも賊であるまいか、賊と言たが誤りか。」　無「臭い者身知らずと敵手を知らぬ泥棒呼ゝり、ちッと詞が過やうぞ。」　助「何で詞が過るのだ、東叡山にゝ瑠璃光如來、淺草寺よは正觀世音、深川八幡大菩薩、龜戸自在大天神、御藏前には不動明王、當所聖天觀喜尊天、あらゆる神佛も聞し召せ。ろもや男の魂い、神の御鏡佛の淨玻璃、曇り霞がちッとでもあッちやァ誠は照されねえ。仁義を二

つの眼に備へ、五常を五躰の内に治め、道理よ逢へば水に入り、惡事を見ては石でも碎く、形も吝な野郎だが心い清き澄田川、度胸は据ッた富士の山、命は夏の雪ほども惜まぬ名さへ三國一、尾上の松の万切末代、鐵漿溷の子子よりまだ〳〵多い男の數、擇て擇て擇拔た此の助六い男一疋、義を誣ひ非道の汚れた指させるものなら指して見ろ。」　ときッといふ。　無「了得の助六よく言た。此間からの紛紜の始末、夫れぢやァ是れから附けやうか。」　助「固より喧嘩に出て來た己だ、れ主が事を好むなら後へい微塵も退きやァしねえ。」　無「夫なら助六ちよッと出ろ。」　助「どれ殺生をして呉やうか。」　と誂への合方になり、兩人前へ出て宜しく思入。　無「助六、お主い今何と言た、神明佛陀を誓ひに立て、立派よ廣言はらッたな。」　助「夫が何うした。」　と無休思入あッて、　無「お主の内の中二階、殘暑の嚴しい八月早に、障子襖を締切て、人の通路を止たのは、あれは一躰何の爲だ。」　助「や」　とぎッくり思入。　無「よもや明てい言はれめえ、神の御鏡佛の淨玻璃、曇り霞のないものゞ、何で人に躲すのゞ。いやさ惡事を見ては石でも碎く男が、何で科人をお主は内へ匿まッた。」　助「さァ夫は、」

無「出入は出入、詮議は詮議、きッと詮議をしざァならねえ。」　ときッといふ。
ぢッと思入あッて、　助「入ざる人の詮議立、夫れで出入を逃る氣か。」　無「え
えや出入は後の事、人を泥棒呼ばりした其返報よ詮議をするのぞ。人と出入がし
たいなら、自分の身から清めて來い。」　と是よて助六口惜いといふ思入よろし
くあッて、俄かに氣を替へ、　助「たい無休。」　無「何だ。」　助「生れて以來手
を下げさ事を知らねえ助六が手を突て詫るから、此出入ハ明日の晩まで何うぞ待
てハ呉れめえか。」　無「こりや爾うありさうな事だなァ。待なら待ても遣らうけ
れど、只此まゝぢやァ待れねえ。」　助「己も三谷の助六だ、臆怖未練に逃ハしね
え……併し其方で待れぬと言ふなら何うも仕方がねえ。」　とまた思入あッて、
助「斯うしやう、當座の恨みは今こゝで、撲なりと蹴るなりと思ふ存分した上で、
出入ハ明日まで延して呉え。」　と始終口惜いといふ思入よて言ふ。　無「口や
どでもねえ意氣地なし、夫れぢやァ斯して」　と下駄にて助六を踏つける。助
六口惜いといふ思入れあッてぢッと辛抱する。　無「是れでもお主ハ手出をせぬ
か、いけ張合のねえ」　と強く蹴飛し、　無「野郎だなァ、」　と是よて助六

きッとなる。　無「何だ〳〵其面何だァ。」　と助六拳を握り齒切して、口惜い
といふこなし。　助「手出しはしねえ、踏なせね。」　無「お主は能くも此無休の
面を土足にかけ居ッたな。」　と下駄よて助六の面を蹴る。助六むッとして、
助「もウ勘忍ゞならねえわい。」　と立ちかゝる。無休ハ伸の銀烟管にて、助六の
眉間を破り、きッと見え。助六額に手を當て、血の出たのを見てきッとなり、
助「やゝれ主ハ男のしやッ面を、」　無「破たらお主は何とする。」　と助六思入
あッて、　助「男を研く助六を、心のまゝに踏打擲、夫れで喧嘩は五分と五分だ。
男が面を破られちやァ、もウ堪忍の緒が切れた。お主ゞ命ハ貰ッたぞ。」　無「小
癪な熱を吹きやァがるな。」　と早めたる合方に、双盤を冠せたる鳴物になり、
双方抜き合せて、立廻りよろしくあッて切結ぶ。爰へ家臺暖簾口より、饅頭屋の
お米好みの拵へにて出で、床几を眞中へ仆してきッと留る。　お米「まア〳〵待て
下さんせえなァ。」　無休「見れバ女の分際で、」　助六「白刃の中へ飛込で、」　無休「怪
我せぬうちに、」　助六「退いた〳〵。」　と詫への合方に成り、　米「女だてらに
大それた、男と男の立入の中へはいッた出過者と、兩親分のね叱りも顧みずして

止たのゝ、處も神の清め庭、しかも私ゞ内の前、孰らに怪我ゞあらうとも、重ね扇の重なる御縁、祇園守護の結んだ中、濟ぬゝ私し只一人、憚りながら此お米ゑ、何うぞ預て下さんせえなァ。」　と宜しく双方を慰める。　助六「退くに退かれぬ白刃だが、ちッと此方に望みもあれば、黴の生へた梅干が引くなら、姉ェに任せやせう。　無休「取るに足らねえ三文奴、止人ゑ花を持たすのも、段々取ッた年の功。」　お米「夫れでは預けて下さんすか。」　無休「今日は姉ェに任せるゞ、明日でも逢たら最期の勝負。」　助六「夜さへ明けりやァ此方の身體、生血の雨を降らして遣るから、首を洗ッて待ッて居ろ。」　無休「そんなら助六、」　助六「梅干ぢゝい、」　無休「急度詞をつゞへたぞ。」　ときッといふ、唄に成り、無休上手へ入る。お米ゝ助六の傍へ寄り、　お米「助六どの異ッた處で逢ひましたなァ。」　助六「おゝ貴女は長田のお嬢様、何うして此家へ、」　と敬ふ。　此内上手より以前の長官出來りて後へ忍ぶ。　駒野「助六どの定めて様子は知ッてゞあらう、兄上様の御出奔より、身にお暇が出ましたゆゑ、何うぞ一たび兄上の安否の程を聞きたいと、此家を頼んで此の姿」　助六「さては夫ゆゑ麓屋の娘とお成りなされましたか。」　と此時

以前の長官鬘を脱ぎ、附髭を取り、唐服を脱ぎ、長田の若黨權内にて、すッと前へ出、　權内「駒野様是れにお出なされましたか。」　駒野「おゝ權内ゝ何して爰へ。」　權内「御二人様の御家出より其御在所を尋ねん爲め、又二つには御邸の安否の程を聞きたいと、耳の垢取に姿を變し、所々方々と尋ねるうち、先刻是れゑて貴女様のお出の事ゝ聞きましたが、其効もなき御家の騒動、」　駒野「や何と言やる。」　權内「さァ殿様御逝去遊ばして、御世子なきゆゑ小森家ゝ、除國の御沙汰ゑ極りました。」　駒野「やゝゝゝやァ」　助六「うム夫れでは愈よ御家ゝ斷絶、夫れと知たら無休めに閙々退けは取るまいもの。」　權内「此方は三谷の助六どのか、旦那が其許ゑ匿まひある事、訴人あッて町方より捕方向ふと專ら評判。」　駒野「なに兄上を町方より」　助六「召捕方に向ふとか、是れも無休と内匠めが……こりや斯しては居られぬわい。」　ときッと成る。　駒野「兄上様のお出の事は、先刻無休ゑ訴人する者のあるのを聞ました。只此上は兄上に一目逢して下されいのう。」　助六「直ゑ後から裏口へ、」　權内「お伴致して參じまする。」　助六「思へば憎い髭の無休、今宵を去らず、」　と此内以前の小助虎うかゞい出て、　兩人「助六待て。」　と掛る

を突廻し、一寸立廻ッて投る。雨人とんぼ返るを道具替りの知らせ、　助六「うムさうだ。」　と尻をはしより、きッと見得。仰よて此道具廻る。

本舞臺三間の間平舞臺、向ふ眞中暖簾、上手一間の低き地袋戸棚、此上よ熱田明神の掛物、三寶の上よ眞鍮の神酒陶り、下手一間まいら戸の押入戸棚、上の方一間中二階、障子立切り箱梯子、いつもの處門口下の方一間の間、助といふ字を大きく書し屏障子、此下路次口にて見切り、暖簾口の上よ立派な神棚、都て三谷助六内の體。爰に半二、長三、寞四の子分三人、派手な單物の拵へ、助七の子役を遊ばして居る。子分腕鐵の喜次郎、派手の拵へ、湯上りの體にて腕をまくり、腕の鐵輪を見せて爪をとり居る。此見え流行唄の合方へ待乳山の臺拍子を冠せて道具納まる。

助七「昨日買ッた桔梗笠ゲ、此樣に毀れてしまッたよ。」　半二「言とねえ事た、此通り到頭破らしてしまひなすッた。」　長三「桔梗笠い骨せえ有りやア、私が張ッて上げやうよ。」　寞四「大層急に闇く成ッた。どれ明りでも點て來やう。」　と寞四暖簾口へはいる。　長「何うして是れを毀しなすッさか、親骨殘らず折れてしまッ

明神

て、殘ッて居るのは子骨ばかりだ。」　半「助七ちやん、爺に似て威勢が好いから堪らねえ。」　と莫四出て神棚へ燈明を上げ、切燈をかけながら、　莫「斯みゝッちく毀されちやア、親分さんも姉さんも、手翫で壽命が縮まるだらう。」　喜二「此四五日は胸騷ぎがして、不斷ゝ延喜ゝ言ゝねえ己も、何だゝ心にかゝッて成らねえ、もう親骨が毀れたの親の壽命が縮まるのと、忌な事を言ふのゝ止ねえ。」と氣になるといふこなし。　助七「夫れでも此樣なに毀れてしまッた。」　喜二「七ちやんまでが同じ樣に擔ぎやアしねえ、もゥ止ねえ。」　半「夫ゝさうと先刻よから、不動の子分が親分ゝ内に居るか、と尋ねに來たが、」　長「いつもの留守でも自分に來て歸へりを待ッて居る人が、」　莫四「今日に限ッて見せに遣こすと、一體何うした譯だらう。」　喜二「己も夫が氣になるから、鎌髭兄イが出た序ゝ、何處か其所等を一遍通り尋ねて呉ろと頼んだのゝ、いつもの調子で候べく候、氣樂な奴にやア氣が揉切れねえ。」　助七「喜イや爺は何處へ行ッたえ、己ア逢ひてえよ。」　喜二「七ちやんまでが氣を揉んでるのゝ、何處を遊んで居なさるのだなア。」　と喜二助七を抱いて門口を覗く。出の唄よなり、向ふより以前の助六腕組をして出來る。

喜二「おゝ七ちやん爺が歸ッた。」　助七「爺早く歸ッて呉ねね。」　と是ゑて助六思入れあッて、氣を替へ本舞臺ゑ來り、　助六「七や喜二ゐ抱れて何處へ行くのだ。」
喜二「餘り歸りが遲いから、今七ちやんと表まで見ゑ行かうと思ッた處だ。」　助六「また腕鐵が愚痴ッぽく、小供を出しゑ騷いだのだな。」　助七「喜イは女の腐ッたやうだ。」　喜二「こいつァ一番へこんだな。」　助七「爺桔梗笠の親骨ゞ折れたから、又買て呉ねえよ。」　と、是を聞き、ぎッくり思入れあッて、　助六「二本揃ッた親骨が、殘ず毀れて殘るゝ子骨、」　と、はろりとする合方になり、暖簾口より女房おまき好の着つけ、ひッゝけ帶にて出來り、　まき「親分今お歸りなさいました
ゝ、今日ゝ大層遲ゥッたが、聖天樣の御祈禱ゝ、首尾よく護摩も濟みましたかね。」
助七「神信心ゝ仕やうものだ、護摩を焚いて拜みを上げ、神闍を引たら大吉ざ。」
まき「夫ゝまァ宜かッたねえ、着物が汗になッたらう、行水の湯も沸いて居るから、内へ這入ッて汗でも流し、さッぱりとして一口お上り、」　と是ゑてぢッと思入れあッて内に居る。　助七「金龍山で湯に這入ッたから、もう行水ゑは及ばねえ。洗濯をした浴衣があるなら、小ざッぱりと着替やう。」　まき「あい。」　とおまき

浴衣を出し着替る。　此時行燈ゑて眉間の疵を見て惚りする。　まき「親分お前ゝ喧嘩をおしだね。」　助七「信心參りに行ッたものが、何しに喧嘩するものか。」　喜二「夫れでも眉間の其の疵が、」　長、半、莫「何うゑなすッた。」　助六「や」　と思入れあッて氣を替へ、　助六「馬鹿氣た事もあるもので、下向の折に石段を三段ばゝり踏外し、機會に石の玉垣の角で怪我をした疵だ。」　まき「男を研く家業のお前、夫れゑ連添ふ私だに、逃れぬ意地の立入に、後を見せてお歸りとゝ、一度も言ッた事ゝない、子まで爲したる女房に隱さなくッてもいゝぢやァないか、餘り夫れぢやァ水臭いやね。」　喜二「こいつァ婦公の言ふ通りざ、闇にも越える待乳山、轉んだ怪我たァ受取れねえなァ。」　助六「いつも喧嘩で氣を揉せるから、意地から拵えた眉間の疵と、一圖ゑ思ふは無理ぢやァねえが、喧嘩で額を割られちやァ、世間へ出られぬ此の助六、生て歸らう道理がねえ、何とさうしたものぢやァねえか。」
とおまき心着き、思入れあッて中二階へ目をつけ、　まき「成ほど妾の思ひ過し、惡かッたから御免なさい。此江戸中へ名の賣れた男が額に疵を受け、生きて世間へ出られまい、轉んだ怪我でも大事な額、療治をせずは成ますまい。」　助六「鈌く

そでも付けて置いたら、今夜のうちには癒らうよ。」　助七「阿母ァ爺ゞ歸ッたから、観音様へ行かうよ。」　助六「成程今日ハ十八日、山は定めて賑かだらう、坊主を連れて行ッて見ろ。」　まき「今夜ゑ限ッた事もないゝら、七が其様なに行きたいなら、喜二をつけて遣りませう。」　助六「可笑な事を言ふぢやァねえか、連れ添ッてから十年越し、観音様の御茶湯日は、欠さずお参りしたものゞ、今夜ゑ限ッて何故行ねえのだ。」　助七「喜イやおんぶをして行かう。」　喜二「己も餘り行きたくねえが、」　助六「夜が明ちやァ十九日、おまき貴様も参ッて來い。」　まき「何だゝ今朝から頭痛がして、寒氣がするから止ませう。」　助六「そこが信心の功徳といふのだ。額の疵の痛まぬのも、聖天様の御利益だ。お前の頭痛も急度癒らァ。」　まき「何だか今夜は行きたくないが、折角お前が爾ういふから、着替へをするのも面倒だ、夫れぢやァお参りをして來ませう。」　と心にかゝる思入れにて門口へ出で、　まき「ほんに不動の親分が、子分を見せに遣しなすッたが、何か用でもあるのですか。」　助六「吉三が見せゑ遣したのも、大方髭の」　まき「え」　助六「なに日掛のもつれの埒が開き、其相談に來るのだらうよ。」　まき「さういふ事ならよいけれど、」　と

氣ゑなる思入れ。　助六「何も氣遣ひな事はないから、お参りに行ッて來るがいゝ。」　助七「おッかァ早く行かう。」　まき「夫ぢやァ一寸行ッて來ますよ。」　としづんだ唄になり、おまきは跡へ心の殘る思入れよして、喜二郎助七を負ひ、半二長三莫四ついて向ふへはいる。助六はッと思入れ、時の鐘を打込み床の淨瑠璃に成る。　上「わと見送りて助六ハ、門の戸びッしやりしめり面、はッと歎息をつくゞと、諸手を組んでとやかうと、思案ゑくれの鐘てより、忍びきさやの邸帶、駒野ハ暖簾こッそりと、あけてハ夫といはねども、胸に一物不動の吉三、門口よりさし覗けバ、人氣なければ折よしと、　と文句の通りよろしくあッて、暖簾口より駒野顔を出し、下手より不動の吉三好の拵へにて出來り、門口を覗き思入あッて、吉三「兄貴、兄貴ハ内ゑ居なさらねゝか、不動だ。　上「と音なふ聲に駒野びッくり、おろす暖簾の内にハ助六、然あらぬ体にさし寄ッて、　助六「とろりと此處で手枕をした處だから、遠慮ハねえぢッと此方へ這入んなせゝ。」　吉三「大層内が靜だゝら、己ァ留主かと思ッたのだ。」　上「ずッと通るも油斷なく、眼を配る中二階、　とよろしくあッて上手に住ふ。　助六「一月餘りも逢ねゝうら、陽氣ゞ豪

儀に惡いので、流行感冒でも引いたかと、實い苦勞にして居たよ。」　吉三「能く案じて呉なすッた。御蔭で風邪も一つひかずに、達者で居るから安心をなせね。」

上「何氣なければ助六も、落おち面にうち寛ぎ、　助六「今歸ッて話しを聞いたが、用ありさうに子分の奴を、内へ尋ねに遣したのい、何ぞ急な用でもあるのゝ。」

吉三「急な用でもないけれど、些と此方ゑ頼みがあッて、」　助六「夫れで見せに遣したのか、して己に頼みといふのい、」　吉三「外でくねえが仔細があッて、今まで結んだ兄弟の縁を切ッて貰ひに來たのよ。」　上「と角立つ詞に助六い、心にうなづき笑ひ顔、　助六「何の用かと思ッたら、夫で御主い尋ねて來たのゝ。見れば何うやらけん相も變ッた事を言ひなさるが、夫れにい何か仔細があらう。」　吉三「仔細といふのい外でもねね。お前の樣な意氣地あしの弟分と言はれるのが此方のひけ目で、潮先へ乘込む事が出來ねえゝら、夫で縁を切りに來たのさ。」　上「と言はぬ仔細を此方も夫れと汲み知る粹の果、きッと心を取直し、　と思入あッて、助六「合せものい離れもの、一腹から生てせね、別れ〳〵になるのが弟兄、血液をすゝッて義を結び、生死にまでも一所にと誓ッた中でも根が他人、其方で己ゑ

愛想が盡りやア、望み通りにさッぱりと縁を切ッて遣るとしやう。」　吉三「うん夫ぢやア今から赤の他人、」　助六「夫りやア言ふまでもない事だ。」　吉三「他人となりやア言はざアならねえ、助六出してしまへ。」　助六「出せとい何を、」　吉三「助といふ字を親骨に彫ッた扇と印籠の此の持ちぬしを出してしまへ。」　助六「や」　吉三「拔さしならねえ證據の二品、身體をこゝへ出しなせえ。」　「胸を劈く詮議の難義、中二階には助之進、さては我が身の上なりと、障子細目にさし覗けば、駒野は兄ゞ大事の切迫、また暖簾をかき分けて、互ひに見合す顔と顔、　と中二階より助之進、暖簾口より駒野、彼是一時に顔を出し、平舞臺の二人と顔を見合せ、きッと思入れあッて障子を締切る、思入あッて、　助六「お主い知ッて居るだらう、此の印籠は己が持ち料、扇も慥かに己が彫ッた要の動きいない、其持主は此助六、」　吉三「人を菩家にしなさんな、同じ名前の頭字が助といふので身代りとは、餘り時代な種本だ。其言譯をさせねえ爲め、慥かな證據を連れて來たのだ。」　上「根づよき詞に助六も當惑顔を、ぢろりと、吉三い立ッて門の口、表の方をさし覗き、吉三「もし軍太夫樣、此方へお這入なされませ。」　上「と呼込れて、軍太夫閾を越

すもがた〳〵　と下手より前幕の軍太夫袴大小にて出來り、氣味の惡いといふ思入れにて上手へ住ふ。

吉三「さァ助六此の侍を覺えて居らぬか。」

助六「何處でか慥か逢たやうな」　とぢッと思入あッて、　助六「おゝ此方い慥か後の月、」　吉三「去かも二十日の宵闇よ、」　軍太「田中はづれの蓮田縁、」　助六「喧嘩を買ひに吉原へ、出かける途で怪しい曲者、」　吉三「此方も人に頼まれて、出がけを突れて闇試合、」　軍太「落した狀を拾はんと、探る手先を捻上げられ、」　助六「蓮田へ散らした散蓮華、」　吉三「水のしぶきに押しくらまし、」　軍太「漸々上ッて一息つぎ、」　助六「からむをぐッと引寄せたは、梅香に知れた慥かよ女、」　吉三　逃行く影を呼留めた聲をしるべに打ッたる礫、」　軍太「耳よ聞ねた手紙の宛名、南無三夫をと組付くを、」　助六「腰の尺八拔く手も見せず、またも蓮田へ打込んだは、」　吉三「其時手に入る此の印籠、」　軍太「助六どのの御座ッたら。」　助六「御武家はお前であッたるか。」　吉三「夫につけても其折の、闇に遁した曲物は、」　助六「怪しい女い、」　兩人「誰であッたか。」　上「としら張りの障子押開け助之進胸おし据て立出れば、駒野も心しづ〳〵と、押直ッたる褄さばき、　と中二階より助之進覺期の

思入れあッて出來り、暖簾口より駒野同じく思入れあッて出來り、　駒野「其折手紙を手に入れしは、長田ダ妹の此の駒野、」　長田「礫をうッて逃げたるは、斯く言ふ長田助之進、」　吉三「偖はあの折出會ッたは、」　軍太「駒野助之進であッたるか。」　駒野「手紙い正しく詮議の種と、思ふに効なき世の成行き、」　長田「扇は慥うよ奥殿へ取落せしと覺ねしが、遁れぬ證據のある上は、今は何をか包むべき、愛妾おたねを殺害なし、邸を逐電致せし拙者、いざ縄うてよ軍太夫。」　上「覺期極めし骨格い、流石い武士の魂なり、助六長田を押除て、　と文句の通りあッて思入れ、助六「其印籠い助六が、腰を離さぬ一つ提、もウ斯なッちゃァ逃げいせぬ、實は繪賣の園二郎に頼みを受けて、小森家の御部屋に化けた〳〵のおろく、殺した敵手は此の助六。さァ縄うッた不動の吉三、」　上「と腕押枉げて直ッたる、心は花の江戸氣質、今に三谷の助六と、名は万代語り草、根ざしは此に著るし。吉三は篤と思案を極め、　吉三「助といふ字の二人が名頭、證據は二種、敵手は一人、孰らが誠の科人の、去ろい黑いは追ての事、詮議い後まで緩めて遣らう。」　助六「何んと、」　吉三「心置きなく別れを惜み……　いやさ心を附けて軍太夫樣、後まで張番

なされませ。」　軍太「すりゃ此場の詮議をば、」　吉三「ゆるめて遣るも兄弟の縁を結んだこれもよしみ、どれ出直して來やうりい。」　上「何かいち物不動の吉三、心殘して歸り行く。　と吉三思入れあッて門口を出で下手へは入る。軍太夫もうなづいて奥へはいる。　上「道ひき違へて女房おまき、あたふた戻る我が家の門、内の樣子に身を忍び、聞くとも知らぬ助之進、　と下手よりおまき忍び足よて出來り、格子を覗いて思入れあり、忍ふ心にて立聞をする。　長田「先君既に世を去り給へば、長田が孤忠も牛溲馬溺、もはや恥辱を堪へ忍び、世に存命へる所存もなければ、淫婦おたえが修羅の妄執、晴らして遣るも君への追善、疾く繩うッて訴へ出られよ。」　助六「人並ならぬ御恩を受け、田夫野人の助六に、免許皆傳お授け下され、人に劣らぬ身となッたも、皆な師匠のお蔭といふもの、危ない喧嘩の世渡りゆゑ、いつ寐首をかゝれるか闇討にされる事やら、知れねえ命い風の燈、師匠に代ッて助六が、死ねば此身の花といふもの、何うでも貴下い殺されませぬ。」　駒野「助六どのゝ俠氣い、今に始めぬ事ながら、適れ見上げた其心……もし兄上はや御聞きなされましたか、愈よ御家い除國にござりまする。」　上「聞くに長田い

眼を閉ぢ、　長田「天なり命なり斯あらんとい存せしゆゑ、御順養子の御定めあるやう、再三再四申し上しが、淺井内匠の佞辯よ、御迷ひありし御運の末、」　駒野「御痛はしいい奥樣、これも御胤のない故と、嘸ぞ御歎きでござりませう。御薄命と言ひながら、」　長田「是非もなき世の」　駒野「盛衰ぢやなア。」　上「と兄弟面を見合して、恨み歎くぞ道理なる。助六きッと尋思を定め、　助六「承まはれバ殿樣にい、叔父君とやらがあるとの事、まだ御血縁の絶果てたといふでもなければ、歎願のしやうに依てい、小さくとも御家い再び立ちませう。返らぬ歎きに肝腎の忠義をお忘れなされるのい、まだお早いかと存じます。」　上「といへど長田い頭をふり、　長田「豫てい夫等の覺悟もありしゞ、今となッてい詮ない事、拙者如きの力にい、及ばぬ事と觀念致した。」　助六「そりゃ先生にも似合ぬ仰せ、力の及ぶか及ばぬか、當ッて見ねば分らぬ猪滿一、いふ目が起きるか倒れるか、言いば十八万石の大ばくち、張らずゑ見ちやア居られやすめえ。主家の墓場へ祀も絶え草の生るを先生は、見て居る心でござりますりゃア居られますまい。」　長田「や」　助六「何うして見ちやときッと成る。合方きッぱりとなり、思入あッて、

助六「此助六は三文奴、今戸の竈から生れた野郎、箔の乗らねえ肌合ざが、一刀流の達人と、世ゑ轟いた先生の代りに元の土となりやア、死だ後での身の面目、夫に引返へ先生は、御家の繼目の金くさび、高が女の一人や二人、殺して死ぢやア犬死同然、命にかえて小森家を興しなさるゞ身の譽れ、武士の命を捨るのゝ、此様な時ぢやアござりますまい、斯う言出しちやア金輪奈落、後へゝ引ねえ男の意地、此の助六ゝ江戸ッ兒だ、早く返事をしてお呉なせえ。」　ときッといふ。駒野思入れあッて、　駒野「今助六が言ふ通り、貴下の御身は言はゞ千金、淺井内匠や浪人の深尾十郎左衛門が巧の段々、先ごろ拾ひし密書にて、證據となるべき物もあり、又二つゑは御家の筋目、將軍家ゑゝ御由緒あれば、傳手を求めて再興を御計りなさるが貴兄の御務め、助六どのゝ一命は助ける手段もござりませう、此を思ふて兄上様、御思案なされて下さりませ。」　助六「娘様能くぞ仰やりました。私も無休に眉間を破れ、手を空しくして歸ッたのも、只先生の御命を助けて此身が代りたさ、男の大事な生額破られて、此まゝ存命ちやア世間へ出られぬ此の助六、晩いか早いか死ぬ命、立派に死なしてお呉なせえ。」　駒野「奥にゝ戸山も居りまする。」　助六「吉三も追付け來る時刻、」　駒野「緩々しては居られぬ處、」　助六「夜が短ッかい、もし先生、」　駒野「早く分別」　助六「して下さりませ。」　上「道理を切めて言ひければ、長田は漸々うち點頭き、　長田「男の中の男といふ、了得ゝ名代の助六とて、武士も及ばぬその魂、助之進一禮申す。」　助六「夫れぢやア私を先生の代りに立て下さりますう。」　長田「是も宿世の緣ならん、其方の義氣ゑ勵され、必らず御家を再興すべし。また伜の助七は、不肖なれども助之進が養育致して武士となし、二代の長田助之進、」　助六「親に增ッた伜の果報、夫れで度胸がぐいと据ッて、日本晴ゞ致しやした。」　上「喜ぶ助六兄弟ゝ、さすが名殘の惜まれて、長田「樹下石上の緣ならで、二世まで結ぶ一身二體、」　駒野「生死互ひゑふり分けて、」　助六「死ぬるを花の俠客、」　長田「生きて盡すも武士道の、」　駒野「表を行けば人目に立ん。」　助六「裏から直ぐに寺町通り、」　長田「然らば助六、」　上「立上りてもまた戻る、生死流轉の芝道や、　駒野「名殘は盡ねど、」　助六「男ゝ泣ねゑ涙は出ねゑ、」　上「露を拂ふて助六が、泣らぬ〳〵と拳を握り、飽くまで睜る兩眼は、血を浮べたる如く、長田兄弟うちしほれ、裏口さして、　と助之進駒野暖簾口へはいる。

上「入にける。始終立聞く女房は、涙ぐくして内に入り、　と是にておまき氣を替へて内へはいる。　まき「今歸りましたぞえ。」　上「何氣なければ故どうち解け、助六「おゝ大層歸りが早クッたな、坊主と何うした。」　まき「喜二と夜見世を見て居るので、私は先へ歸りました。」　助六「爾うゝ夫れいいゝゲ、先刻にから咽喉で催促をして居るやうだ、寢酒を一杯つけて呉れ。」　まき「準備は皆な出來て居るゝら、お燗をつけて上ませう。」　助六「何だゝ蒸々暑いゝら、冷の方がいゝだらう。」　まき「ろんならお冷で出しませう。」　上「と言ひつゝ立て運ぶ膳、これも此世の別れゝと、思へば心なまゝ塗箸取揃へて差し出せば、　と文句の通りよろしくあッて膳を運ぶ。　助六「豪勢膳ゲ賑ゝぢやアねねか。」　と助六猪口を取上げ、一杯呑んでおまきよ献す。　まき「私にゝえ。」　助六「一杯やんねえ。」　まき「夫れぢやアお相をしませうよ。」　と思入れあッて、猪口を受けぐッと飲んで助六よ献す時、誤ッた心よて猪口を落す。此猪口見事二つになる。兩人ぢッと思入あッて氣を替へ、　まき「飛だ粗匆を云ましたし、彼方のを持ッて來ませう。」　助六「なに夫れよやア及ばねえ。」　と湯呑をとッて、　助六「さア波々酌げ。」　と出す。れま

き其手を取ッて思入れあッて、　まき「命を捨てるゲ怖いゝら、酒で度胸を据ゑたやうに噂さをされちやア口惜いやね。」　上「と言はれて助六とむねをつき、助六「夫れぢやア今のいきさつを、」　まき「殘らず聞いた其上で別れよ飲んだ水杯、」助六「そんなら未練に止めもせず、」　まき「私も覺期を極めました。」　助六「何にも言はねゑ後を頼むぞ。」　まき「其の心配いれしでない、れ前の罪科が極ッたら、驚てあとゝら」　助六「や」　まき「後へ心を殘さずに、愛から來るのを待ッて居ないで、」助六「自分で首へ縄をかけ、立派に名乘て出る心だ。」　まき「その噴衣にい盂蘭盆に染めた浴衣の野晒好み。」　助六「うム手拭と犢鼻褌い、切立でねゑと巾が利ねえ。」　まき「あい」　上「あいと返事もすみ棚を、開てい泣かぬ胸の波、騒げど色に顯さぬ、男まさりの女房なり。　と此時れまき憂ひのこなしにて浴衣を出し、助六支度をする。　上「夫れとは知らぬ稚兒の、眠氣よ機嫌わるあがき、喜二の春中に泣きむづかり、　と喜二郎助七の子役を負ひ、下手より出來る。　助六「夫れぢやアおまき、」　まき「隨分達者で、」　と助六門口へ出る。是れを助七うれしきこなし、　助七「爺何處へ行くのだ。」　まき「名殘よ一目助七よ、」　助六「おゝ坊主ゝ。」

上「餘念なき兒をつくゞと、見る助六が血の涙、れまきが袖の下涙、なみざゝのかゝる時、　助六「豆で居ろよ。」　と突く。是にて喜二尻餅を突く。此の以前より暖簾口より鎌髭の又七男達一本ざしにて、軍太夫を縛り出來りて見送る。

上「思ひ切たる死出の道、後をも見ぜよ死よ行く、　と助六一散に向ふへはいる。れまき門の柱よ縋り見送りて、するゝと倒れ、わッと泣く。　上「吾妻男の達鏡、勇ましかりける、　と此の見えよろしく、床の三重にて、　幕。

大詰　山谷寺町の場　易行院比翼塚の場

本舞臺二間の間、置き舞臺の敷石、此上に瓦家根、赤塗の門潜附、上の方黒塀、下の方九尺の門番附、瓦家根、小窓板羽目、此の續寒竹の生垣、上の方よ誂への碑、柳の立樹、門の左右下水の心にて石の縁を見せ、都て山谷寺町易行院の体。　合方木魚の音にて幕明く。　と右の鳴物よて、向ふより不動の子分奴清太、尻端折りにて提灯を持ち出來る。後より吉三の女房お七、心のせく思入にて出來り、花道よて、

清太「今時分、やく〳〵と木魚を叩くのい、お通夜でもあるのか知らぬ、薄ッ氣味の惡い事だ。」　と急いで先へ行くを、　お七「清太さん、提灯持が先へ行ちやア闇くッて仕様がないわね。」　清太「だッて姉御、先刻辨天山の八打たから、急がなくッちやア大變だ。」　と言ながら本舞臺へ來り、　お七「大變といふのい、お前よりおまきさんの身の上さ。　助六さんの牢死から、鬱いでばッかり居なすッたが、若もの事ゞ有いせぬかと私い夫が氣に成て、心に油斷いせなんだ

のよ、夕方お湯に行くと言て出なすッたまゝ、夜が更ても歸りがない故、氣になッて探して居るのに、今以て少しも便が知れないゝ……」　清太「何だか慄々寒けがして來た。……夫りやア成程私だとても氣の揉ねえ事ゝない、日が暮てゝ人子一人通りのねえ寺町を、草木の睡る丑三よ、彼方へ行たり此方へ行たり、己ア何だか氣味が惡い。」　お七「並外れた身體をして、弱い事をお言ひでない。」

清太「體よばッかり身ゞ入て、膽ッ玉ゞかせたら、物怖をして何うも成らねえ。」

お七「齒がゆいやうな弱蟲ざよ……こゝゝ山谷の易行院、助六さんの菩提所だから、何ういふ事でゝおまきさんが、來なすッたかも知れないから、門で鳥渡聞てお呉。」　清太「あい合點だ。」　と清太立寄て潛戸をたゝき、　清太「おい爺や、明て呉な、おい己だよ〳〵……外でもねえが三谷の姉公ゞ、今夜お寺へ來やア去ねえか。」　お七「お出なすッたら何時頃よ歸んなすッたゝ知てなら、何うぞ敎へて下さりませ。」　といふ。是にて門番大欠伸去ながら、小窓を開て、　門番「宵から門を締ましたが、誰も來たものゝ御座りませぬ。」　お七「夫でゝおまきさんゝ見えませぬか、大きよお邪魔を致しました。」　と氣の揉ることなし。　清太

「方の着ねえ事よなッた、居ないものなら仕方がねえ、姉公もウ歸らうでゝないか、滅法界に寒さが感じて、己ア身體ゞ縮み上らア。」　お七「お前の身體ゝ些と位縮んで丁度人間並さ。」　清太「冗談處ぢやアありゝしない……夫なら外をまた一遍、」　お七「探して見るとしやうね。」　と兩人門番よ會釋をして、右の鳴物よて上手へはいる。後門番欠伸をして小窓を閉る。時の鐘風の音を冠せて、前幕のおまき女房形、かた端折、手拭を吹流に冠り、七首をさし、大縞の片袖よ切首を包、小脇よ抱へ、ばた〳〵にて向より出來り、思入あッて、直と本舞臺に來る。おまき「嬉しやこゝゝもウお寺、」　とほッとしたる思入よて、胸を撫おろし、手拭にて汗を拭ひ、切首を解て下水にて洗ひ、これを透し見てぢッと思入、

「人にゝ鬼神と言ゝれやうゞ、惡人淺井内匠づらと心を合した髭の無休、良人の仇と一心に凝た力の拳も狂ゝず、不意を狙ッて一うちに、」　と切首を敷石に投付け、七首を拔て鋭尖を調べ、　おまき「讐も恨も是で晴れ、良人の紀念の助七ゝ、長田樣の養子となり、親にも增る武士となれば此身に用ゝなし。心にゝゝる雲霧の、晴れて淨土の死出の旅、夜の明ぬ間に、戒名に入れたる朱をば洗ひ落し、冥

土の良人よ……爾ぢや〳〵。」　と是よて下手に人音する。おまき氣を替て、切首を匿し、匕首を納め、小窓をたゝく。　おまき「もし〳〵、鳥渡こゝを明て下さりませ、墓參りの者で御座ります。」　門番「今小便をして寢たばりだのに、またこつ〳〵叩きやアがる、何でも是れ玉姫樣で勘當された野干ゞ殖て惡さをするに違へねえ、起ぬゞ勝だ〳〵。」　おまき「妾の聲ゞ知れないのか、三谷のおまきといふ者だよ、早くこゝを開て下さい。」　門番「此節の奴ゝ狐までが由斷がならねえ樣よなッたゞ、不斷己ゞ獨言に、三谷の姉公ゝ縹致といひ氣前といひ、彼樣ものを寡婦よした親分さんゞ迷ッて御座らう。檀家の中でも彼の位附屈のいゝ人ゝないと、褒て居るのを聞やアゞッて……いゝゝ、今門を開て薪雜棒でも食して遣らうよ。」　と始終內にて言ふ。おまき氣の急く思入よて、　おまき「何でもいゝから、此の潛を早く開て下さいよ。」　と此內門番向ふ鉢卷尻端折にて棒を持ち、潛りを開いて出來り、棒をふり上て、　門番「さア畜生めこれを食へ。」　おまき「まア浮雲い……私だよ。」　門番「れゝお前さんゝ三谷の姉公、」　おまき「何處よ尻尾ゞ見えるかね。」　と笑ひなゞら帶の間より金包を出す。門番ゝ尻を下し、

鉢卷を外して、極りの惡いといふこなし。　門番「成る程尻尾は有りましねえ。」　おまき「少しばりりだが起し賃、寢酒の足しよして下さい。」　門番「毎度誠に濟ません、是が狐の仕業なら、相場の極ッさ木の葉よ石ころ、光る奴を下さるのゝ、姉公の外にゝでざりませぬよ。はい。」　おまき「爺やアのお艶辭も聞納め、」　門番「え」。　おまき「納めてお置といふ事さ。」　門番「誠よ有難うでざります……夫は爾と姉さんゝ、何して夜深に御參詣なされます。」　おまき「今日ゝ遁れぬ用ゞあるので、夜ゞ明たらお參りを仕やうと思ッて居る所へ、月夜烏にだまされて、七つ前に出て來たよ。……爺やア一寸耳を貸な、」　門番「はい〳〵、何ぞ御用でざりますう、」　と是にておまき私語く事あッて、　門番「能く私しが領領ました、夜明までは誰ゞ來ても開る事でゝでざりませぬ。」　おまき「夫で私も落着た……とは言へ後で助七ゞ、夫と知たら歎くであらう、夫ばッかりが心の迷ひ。」　門番「なよ七ちやんゝ優しいうら、中々泣きゝなされませぬ。」　おまき「時も迫ッた夜明前、霜より先へ消る身の上、返らぬ愚痴に手間取てゝ、人目よ立て耻辱を受ん。」　門番「さア御參詣なされませ。」　と木魚の音にて門番先へは入る。おま

き愁ひよ沈む思入あッて、氣を替へ門へ入る。同じ鳴ものにて、前幕の不動の吉三好みの着つけ、後より三谷の子分鎌髭の又七、同じく俠客の形にて下手より出來り、

又七「高え聲では言はれやせんが、内の親分の死なすッたい、嚴しく吟味立をすると、小森の家ゞ起せえすればと、固より承知で飲なすッたと、專ら世間の噂ですが、小森の家の御家の再興の疵よならうといふ事から、一服盛たを親分も御牢内よい爾いふ事があるもので一服盛て牢死と言立て、詮議の道を斷つといふゞ、夫にしてもあッぱれな男を一人亡くしさなア。……」

吉三「何でも面倒な罪人は、よ。」

又七「何だか骨を拔れたやうで、私いぼんやりしやしたれちやア、氣拔のするのも道理だ。己も兄貴と頼んゞ三谷、腕一本折られたやうだが、是が俠客の花川戸、散る時散らざア名い殘らねえ。」

又七「爾う言われていい違へねえ、私も是から親分に縋ッて隨分男を研き、姉公に樂をさせやせうよ。」

吉三「夫がいゝ〳〵……今夜はけちな出入のために、夜更をして勞れたらう、何やら東が明るんゞ、明日は寛り休みなせえ。」

又七「なアに夜明い平氣な方だ……

……夫ぢやア親分」

吉三「歸らうか。」

と上手へ行く。矢張以前の鳴物にて、上手より以前のお七、後より清太、下手より前幕の腕鐵の喜二郎、孰れも急ぎたる心にて、彼是一時よ出で來り、

お七「おゝ親分ぢやアございませんか。」

清太「鎌髭大哥そこに居たのの。」

喜二「やッとの事で追付た。」

吉三「爾ういふのいお七よ清太。」

又七「腕鐵が何うして來たのだ。」

吉三「見れバ大層息を切て、面の色も惡いやうだが、」

又七「清太もがた〳〵慄へて居るが、」

吉三「何か事でもあッたのか。」

喜二「あッた〳〵大變ゞ有ッた。」

お七「親分、お前さんはお知りでないか。」

吉三「知らねねかとい何樣な事た。」

お七「飛だ事が出來ましたわいなア。」

清太「南無阿彌陀佛々々々々々々。」

とお七い面よ袖を當て泣く。清太い慄へてぺたりとなる。

吉三「何だか譯が分らねえゞ、喜二郎貴樣い知てるのか。」

又七「早く仔細を話しなせえ。」

喜二「今お話しを致しますのさ。」

と相方きッぱりとなり、

喜二「不動の親分も、鎌髭大哥も淺茅が原の紛紜へ行て、今夜い廓へ行かねえから、何にも知んなさるめえゞ、最と先刻素見が、堤で大きな喧嘩があッて、髭の無休が殺されて、上を下へと騷ぐので、

直ゞ其塲へ駈付て、見れゞ無休ゞ駕籠の中で、朱ゞ染ッて殺されて、首ゝ何處へ飛だやら、胴ばッかり轉げて居やした。」　吉三「髭の無休ゝ二刀流の音ゞ聞えた腕利だが、夫れゞ譯なく殺されたゝ、意趣か當座の間違か。」　又七「ひやいな事が出來たものゞ……親分とお前も一旦ゝ内の親分、兄弟の緣まで切て、髭爺の尻押をした事ゞあるから、殺されたゝでゝ濟ますめえ、」　吉三「成程鎌髭の言ふ通り、頭の高え無休めゞ、腰を屈め手を下て、力と頼むゝ不動ばかり、男と見かけて頼むから、此立入を聞て呉ろと、下ゝら出られて段々と、仔細を聞を長田といふ小森の家の惡人ゞ、家を潰さう巧みにて、大事な御胤を身ゞ舍した、御部屋を殺して助六の内へ駈込み、匿て居るが、何をかくさう此無休も、小森の家中で劒道の師範までしたものなれど、長田が鋭い侫辨の舌の劒で扶持を斷れ、今でゝ奴の頭となッたが故主の大事と聞く上ゝ、何うも此まゝ指を噛へて引込でゝ居られねえと、涙を流して頼むのら、地体狂ッた事と言ちやァ、折釘までも憎む己ざ、大罪人の尻押そる三谷の心ゞ憎くなッて、義絶をした上向ふへ廻り、詮議を此方へ引受たが、後で思へば無休めに、甘々一杯食された。折ゞあッたら仕返しを去

ざァ成ぬと思ッて居たゞ、死ざと聞ちやァ仕方がねえ。」　喜二「其樣なら妹公や私等を、身ゞ引受て後々の、世話をなすッて下さるのゝ、」　吉三「義を守ッて死だ兄貴ゞ、ほんの己が詫心だ。」　又七「今ゞ始めぬ直な氣性、喜二も能く御禮を言ひねえ。」　吉三「なァゞ禮ゞやァ及ばねえ……お七ゝまだ泣て居るのか、手前の大變と言たのゝ、何しさ事だ言て見ろ。」　と是れにお七ゝ涙を拭ひ、　お七「今喜二さんゞ言なすッた、無休さんの下手人ゝ、三谷の伜の助七と、死骸の側へ訴へ狀ゞあッたといふので、自身番で召捕方の手當をして居る最中に行合せ、」　清太「腰を拔かして、參りました。」　吉三「其下手人は助七と訴狀があッたといふのか。」　又七「若し七ちやんの名代に、長田樣が親分の敵を討て下すッたのでは有りやすまいかねえ。」　喜二「長田樣ゝ手利だから、成る程此奴ァ爾かも知れねえ。」　お七「夫にしても、もし親分、宵から三谷の姉さんが、何處へ行なすッたやら、皆呉姿が見えないので、氣になッて成ないから、清太を連て探して居りますが、何處ぞで逢はなさりませぬか、」　又七「なに姉さんが、」　喜二「居なさらねえと、」　吉三「夫れぢやァ姉公は

此世よい、」　お七、又七、喜二「何ですと。」　吉三「居やア去めえよ。」　ときッといふ。
皆々惚りする。清太い懍へながら、　清太「な、な、なむあみだぶ〳〵。」
吉三「夫を知つたい斯いふ譯だ。」　と相方きッたりとなり、棄石よ腰をかけて、
吉三「常々姉公の言つて居るのよ、亭主は獄屋の鬼になり、可愛い子供い先生ゞ、
養子になッて親勝り、立派な武士よなッたから、此世に名殘はねえけれゞ、死な
れぬ事ゞ一つあると、問ず語りに言なすッたが、今夜無休を討たのは、言　と知
れたおまきさん、女の一念岩鐵の無休を討た曉は、比翼よ彫した戒名の、主とな
ッて苔の下、同じ石碑に極樂の、樂しい夢を見る覺期、男まさりのおまきさん、
了得は三谷の助六に連添ふ女の魂ゞ、男も男女も女、揃ひも揃ッた江戸氣性、あ
ッぱれ人の龜鑑だなア。」　お七「さていい爾うした事であッたか、知らなんだのゞ
恥しい。」　又七「此方等二人も親分の息のゥ、ッた奴だのよ、」　喜二「髭よ手出
も出來なんだとは、」　又七「思へば口惜い」　兩人「事ゞなア。」　と此時門の
うちにて、大變だ〳〵と騷ぐ。皆々きッとなる。爰へ潛を開て、門番「易行院」
と記しある提灯を持て出來り、後より小坊主一人、孰れも遽てたる心にて、懍へ

なゞら出來る。　小坊主「志摩守樣の御邸は茅町ゆゑ、夜明前にお訴へをせねばな
らぬぞや。」　門番「夜が明てから御檢視が下ていい、後が面倒でござります。早く
お急ぎなされませ。」　小坊主「私は急ぐ積りぢやゞ、足ゞちッとも急ぎませぬ。」
門番「死人をお客の御寺樣ゞ、其樣事でいい名僧にい成れませぬぞ。」　と是にて吉
三心がゝりの思入にて、ずッと前へ出る。是にて兩人腰を拔してどうとなる。
吉三「只事ならねえ樣子といひ、寺社奉行へ訴へとい……」　と小坊主を抱起す
事あッて、　吉三「何か變でもござりましたゥ。」　と此内又七門番を抱起して、
又七「爺さん、私を見忘れたか。」　門番「おゝお前さんい三谷の子分衆。」　小坊主「そ
の内儀さんが基原で、」　皆々「えゝ」　と惚りして手を離す。是よて兩人べた
りとなるを、道具替のしらせ、　門番、小坊主「南然阿彌陀佛々々々々。」　と早き合方、
木魚の責にて、此の道具廻る。
木舞臺一面の平舞臺、眞中に誂へ助六の石塔、是に「皈空西入淨心信士」「預祈
緣譽禎三信女」と戒名彫附あり。後に新しい塔婆立あり。上下に丸物の石塔、
後石塔の書割、上の方樹木、下の方寒竹の生垣にて見限り、都て易行院墓所の

体。閼伽桶に樒を入れ、石塔へ無休の首を備へ、此前へ莚を敷、此上におまき膝を縛り、匕首にて自害をなし、うつ伏になり居る、但し吹替なり、此見得よろしく、合方風の音よて道具納る。　と右の合方にて、下手より吉三お七又七納所一人案内して出來り、

お七「やゝおまきさんが果敢ない最期。はア。」　と泣き入る。　吉三「鎌髭、死骸を調て見ろ。」　又七「おい。」　又七「戒名の朱を洗ひ　と死骸を見る事あッて、落し、只だ一と突に此の自害。」　吉三「可惜女を死なしたなア。」　と皆々惜いといふ思入、前の鳴物よて、下手より分銅の印、腰よ山道の一本筋の紺看板にて、仲間雪笹と分銅の定紋、上よ山道一本筋の弓張を持て出來り、後より寺社同心小川孫一郎、分銅の印羽織、裁着、大小、赤房の十手を前へさし、後より住職寂心、老たる僧のこしらへよて出來る。　仲間「御検視だ、孰れも控へい。」　と是よて皆々下手へ住ふ。　小川「拙者は寺社奉行松原志摩守の手附同心、小川孫一郎と申す者、當院内に於て變死の訴へに依り、早速検視よ罷り立てござる。」寂心「寒中と申し、殊に夜陰早速の御検視御苦勞よ存じまする。……即ち死骸をわれ

なる女、疾と御検視下し置れまして、穩便の御沙汰を願しう存じまする。」　と是にて提灯に照し、検視する事あッて、　小川「正しく自殺よ相違なし、して此なる女人ハ當寺檀越の者でござるう、夫れとも他より紛れ込だ者でござるう。」寂心「是れハ當院檀家の者、三谷の助六と申しまして、即ち此石碑よござりまする戒名の者の妻、おまきと申す者でござるが、助六の義ハ先達て小森家の愛妾おたへの方を私の宿意を以て殺害致し、牢舍中死去致しましたれば、拙僧より申し請ひ、則ち此に葬りましてござる。」　小川「然らバ死したる良人を慕ひ、是まで參ッて自害をば致せしものと相見える。……提打是れへ、」　と矢立を出し、書面よ認める事あッて、　小川「年齢ハ幾つでござる。」　寂心「其義は頓と、……吉三の幾つでござッた。」　吉三「つひ私も覺えませんが……のうお七、」　お七「私に慥か二つか三つ上だと覺ゑ居ましたが、」　又七「へゑ姉さんハ二十六でござります。」　小川「二十六歳か……惜い最期を遂させよなア。」　と四方を見て、無休の首よ目をつけ、不審の体。　小川「夫につけても心得難きハ、石碑よ手向し彼なる首級は、彼りや何者の首でござるぞ。」　と是にて吉三、お七、又七、顔を

見合て、ぢッと思入。　寂心「其義い一向よ」　小川「知らぬと言ッしやるか、」
ときッと言ふ。以前の鳴物にて、下手より以前の小坊主、提灯を持ッて先に、前
幕の長田助之進、袴羽織大小にて、助七袴羽織大小よて、手を曳き出來る。後よ
り二役奥女中綾瀬、御守殿よて仲間に目錄臺を持せ出來り、檢視を見て控へる。
寂心「お丶貴下は長田助之進どの、能くぞお出下された。」　長田「先刻火急の御人
よ依り、早速罷越ましたが、おまきが自殺を遂たるよし、承まはッて驚き入まし
た。」　又七「やア七ちやんがお武家よ成た。」　お七「ほんに立派な此姿、息ある
うちよ只一目。」　吉三「また泣やアがるか控へて居ろ。」　小川「拙者い寺社の同
心なるが、由緣の方と御見受申す。最早一應檢視も濟バ遠慮よ及バず」　と死
骸よ會へといふ思入れ。　長田「はッ。」　と助七の手を引き、死骸の側へ進む。
助七「やア御母ゞ……はア。」　と泣入る、　吉三「御武家よなッたものが、未練
よ泣てい人ゞ笑ふよ。」　お七「とい言へ親子一世の別れ、是れゞ泣ずに居れやう。」
又七「かゝりや繫る鎌髭よ、傳ふ涙を手向草、」　助七「坊は優しく成たから、何う
ぞ死ずよ居てお呉。」　と死骸よ取縋る。是にて皆々ほろりとする。　長田「檢

視の御指揮あるまでは……扣へてござれ。」　ときつといふ。小川も愁ひの思入
あッて氣をかへ、　小川「由緣の方とあるならば、此首級を御存なるう。」　長田
「うム是ぞ正しく深尾十郎左衛門、」　小川「なよ深尾十郎左衛門とは、」　長田「是
れよい段々仔細のある事、具に申せバ事長けれバ、概し仔細を申し上ん。元此の
深尾十郎左衛門と申せ者い、小森美作守の家來よて、劍道師範を勤めしが、重役
淺井内匠に阿り、其覬心を得たるより、邪非道を働きて、門弟等を惱す折から、
身不肖なれども君命に依り、某諸國修行を果し、聊か劍道を究めまして、歸着の
のち、十郎左衛門彼より立會を申し出、御前よ於て一本勝負の試合を致しました
るが、彼奴某にうち負たるより、門弟忽ち某の道場へ入門致し、某却ッて御師範
役と相成かるよ、面目なくや氷の暇を取りましたゞ、其後髭の無休と名乘り、無
賴の者を語ひて、廓を横行致せし處、主人美作守病氣に依り、世子のなきを幸ひ
に、淺井内匠の惡事に與し、妖婦を君よ進めまゐらせ、まッた淺井が召使よ産せ
し一子、園二郎と件の妖婦と野合して、出來たる孩子を主君の胤と僞り立て、小
森家を横領なさん彼等が巧み、」　と是にて綾瀬會釋をる事あッて、　綾瀬「實

や天に私しなく、御部屋い人手に敢ない最期、我君様も御病氣募り、竟に御死去遊しまして、一旦御家は絶ましたゞ、長田様の忠節にて、此度叔父君和泉様へ新よ御朱印下し置かれ、御家もこゝに立ましたれど、淺井内匠は罪科極り、切腹仰せ付られまして、惡事の連累十郎左衛門も、召捕方の評定を致し居りましてござります。」　吉三「何をお隱し申しませう、髭の無休い私等の仲間でころあれ、義を知らず弱い奴等を惱して、廓を暴す大惡黨、」　又七「金龍山の仲見世で、助六親分が手出もせず、眉見を破れた其上に、牢死をしたも無休めが、」　お七「仕業と言て姉さんも、遺恨に思って居なさんした故、由斷を見濟し此の通り、」　吉三「敵を討たで」　吉三、お七、又七「御座りませう。」　と小川感心といふ思入れ。綾瀨は寂心に向ひ、　綾瀨「只今御聞でござりませうゞ、長田様が忠義に依て、小森の御家名立ましたは、全く三谷の助六が、義を見て命を惜まざる、身の行ひに因る處と、君にも深く御感遊ばし、當寺へ賜る祠堂金、此ところにて方丈様、御納めなされて下さりませ。」　と仲間の持たる目錄臺を寂心の前へ直す。　寂心「御作善なれば辞退い無益、納受致すでござらう。」　長田「またおまきが供養の代い、助七よりして納めますれば、永代御回向お頼み申す。」　と懷中より一封を出し、之を扇に乗せ、助七の手を持添へて出す。　寂心「御念の入たる御供養料、厚く讀經を致すで御坐る。」　小川「是にて委細の様子も知れた、無縁の首い院内へ埋葬あッて然るべし、おまきとやらの遺骸い、檢視も濟バ由縁にて、厚く葬り得させられよ。」　又七「有難うござりますが、無休の首い町方にて、」　小川「いや、萬事い拙者が胸にござる。」　長田「恐れ入たる御計ひ、義人貞婦の靈魂も」　寂心「始めて受くる安樂成佛、」　綾瀨「一旦絶えし小森家も、再興あれば世も安く、」　吉三「佛も紅蓮の花咲きて、連理を契る比翼塚、」　お七「此世彼代と變るとも、譽れい朽ぬ江戸自慢」　又七「美名を慕ふ後の世に、此の鎌髭も鼻自慢、」　と臺詞順にわたり、夜明の心にて、鷄笛になる。　小川「實に心地よき、」　と小川提灯を取ッて吹消すを木の頭、　皆々「曉ぢやなア。」　と合方熱田の朝清めの太皷の音にて、よろしくひやうし、幕。

江戸自慢男一疋（えどじまんおとこいっぴき） 終

明治廿四年五月二十日印刷
同　年五月廿五日出版

定價金八錢

東京市日本橋區本町三丁目十七番地
發行所　原亮三郎

仝
印刷者　日置九郎

仝
發兌　金港堂本店

大阪市東區南本町四丁目二百廿一番地
大賣捌　金港堂支店

宮城縣下仙臺市國分町
大賣捌　金港堂支店

版權所有

100-